

Vol.73

Vol.73 (2017年冬号)

PMI 日本支部 ニュースレター



Best Practice and Competence / PM事例・知識 3

Activities / 支部活動 31

PM Calendar / PMカレンダー 39

Fact Database / データベース 40

Editor's Note / 編集後記 44

Best Practice and Competence / PM 事例・知識

| | |
|--|-------------------------------|
| ◆ PMI Japan Festa 2017 全体報告 | 3 |
| Festa2017 統括プロジェクト・マネジャー PMI日本支部 セミナープログラム 城島 孝明 | |
| ◆ PMI Japan Festa 2017 セミナーレポート | 5 |
| • 泥にまみれる ～ 富士通の農業クラウド開発プロジェクト ～ | |
| 講師：渡辺 浩司 氏 | PMI日本支部 セミナープログラム 松本 弘明 |
| • 『Red Bull AIR RACE CHIBA』 ～ 厳格な日本の規制の中、なぜ開催できたのか? ～ | |
| 講師：河野 真二 氏 | PMI日本支部 セミナープログラム 川村 祥二 |
| • 富士フィルムのイノベーション | |
| 講師：柳原 直人 氏 | PMI日本支部 セミナープログラム 栗田 悠毅 |
| • 世界初を生み出すセブンドリーマーズ ～ 全自動衣類折りたたみ機 | ーランドロイドー への挑戦 ～ |
| 講師：阪根 信一 氏 | PMI日本支部 セミナープログラム 近藤 昇久、城島 孝明 |
| • UPDATE MOBILITY ～ 自動運転に挑むSBドライブの取り組み～ | |
| 講師：上村 穰 氏 | PMI日本支部 セミナープログラム 城島 孝明 |
| • 変化し続ける組織のプロダクト戦略史 ～ 経理の自動化から始まったビジネスプラットフォームへと続く道 ～ | |
| 講師：鈴木 一也 氏 | PMI日本支部 セミナープログラム 大島 康宏 |
| • 日本発の民間月面探査チーム「HAKUTO」の挑戦とレース後の展望 | |
| 講師：袴田 武史 氏 | PMI日本支部 セミナープログラム 鬼東 孝則 |
| • インドネシア・ジャカルタ市内での高速道路建設工事 ～ 落下傘部隊の奮闘記 ～ | |
| 講師：大西 陽子 氏 | PMI日本支部 セミナー委員会 豊田 光海 |
| ◆ 【部会紹介シリーズ】 その6 『ステークホルダー研究会』 | 20 |
| ステークホルダー研究会 代表 河野 竹敏 | |
| ◆ 【部会紹介シリーズ】 その7 『組織的プロジェクトマネジメント研究会』 | 22 |
| 組織的プロジェクトマネジメント研究会 副代表 池田 修一 | |
| ◆ 【部会紹介シリーズ】 その8 『人材育成スタディ・グループ』 | 27 |
| 人材育成スタディ・グループ リーダー 三好 きよみ | |

Activities / 支部活動

| | |
|---|----|
| ◆ 2017年度 地域セミナー 開催報告 | 31 |
| PMI日本支部 企画、地域サービス担当理事 浦田 有佳里 | |
| ◆ 「PMI日本支部リーダーシップミーティングLM2017」 概要報告 | 33 |
| LM2017 運営チーム・リーダー 伊熊 昭等 監修：PM コミュニティ活性化委員会 委員長 当麻 哲哉 | |
| ◆ PMI日本支部中部ランチ設立2周年記念特別セミナー開催報告 | 36 |
| PMI日本支部 中部ランチ運営委員 宮崎 真弘 | |

| | |
|------------------------------|----|
| PM Calendar / PM カレンダー | 39 |
| • PMI日本支部関連セミナー等 | |

| | |
|------------------------------|----|
| Fact Database / データベース | 40 |
|------------------------------|----|

| | |
|----------------------------|----|
| Editor's Note / 編集後記 | 44 |
|----------------------------|----|

◆ 商標等について

「PMI Project Management Institute」とそのロゴおよび「PMP」、「CAPM」、「PMBOK」、「OPM3」、「Quarter Globe Design」は、米国および他の国で登録されているプロジェクトマネジメント協会のマークであり商標です。プロジェクトマネジメント協会のマークの対象リストについては、プロジェクトマネジメント協会の法務部門へお問い合わせください。「ITIL® (IT Infrastructure Library)」は、英国及び欧州連合各国における英国政府 Cabinet Officeの商標又は登録商標です。

Best Practice and Competence / PM 事例・知識

PMI Japan Festa 2017 全体報告

■ Festa2017 統括プロジェクト・マネジャー

PMI日本支部 セミナープログラム 城島 孝明

2017年11月11日(土)、12日(日)の2日間にわたり、芝浦工業大学豊洲キャンパスにおいて、PMI Japan Festa 2017を開催致しました。本Festaは今年度で9回目の開催になりますが、例年通りPMI日本支部セミナープログラムのメンバーが主体となり企画および運営しています。約10ヶ月の準備期間を経て、大きなトラブルもなく成功裏に閉会を迎えることができましたが、これもひとえに関係者および参加者のみなさまに支えられたからこそであり、この場を借りて感謝申し上げます。

今年度は「不確実性」をキーワードとして、「Managing uncertainty ~ 未知の領域においても志高いプロジェクト・マネジャーに ~」というテーマに基づき、農業から宇宙事業と多岐に渡る産業界から8名の講師をお招きし、その未知の領域における挑戦や経験を共有していただきました。講演内容も幅広く非常に興味深いものでありましたが、一方で、各講演間には共通のキーワードがあったのでは無いかと思います。例えば、プロジェクトを成功させたいと言う強い情熱や、

ステークホルダーとの良好な関係の構築がプロジェクトに進捗において非常に重要であることを、講演を通じて改めて実感した方も少なからずいらっしゃったのではないのでしょうか。

なお、講演内容の詳細につきましては、セミナープログラムのボランティア・スタッフが執筆しました次ページからのセミナーレポートがありますので、当日参加された方も参加できなかった方も是非ご一読ください。

また、新たな試みとして、多くの方に聴講いただきたいという考えから会場を都心に移すとともに、地方在住の方・当日は家を離れられない方も参加していただけるよう、リアルタイムのオンライン中継サービスを実施しました。これにより、延べ人数では昨年度よりもはるかに多くの方々に聴講いただくことができました。

交流会には5名の講師もご参加下さったことで、参加者いただいた方にとっても非常に有意義な時間になったのではないかと考えています。



■PMI Japan Festa 2017 全体報告

皆様からいただいた受講完了報告（アンケート）は貴重な資産として、来年度のFestaあるいは月例セミナーの運営品質の改善などに向けて有効活用させていただく予定です。多岐にわたる叱咤激励をいただいておりますが、講演の満足度は、概ね90%を上回る結果となっています。

2018年のFestaも秋に開催予定です。PMI日本支部設立

20周年、Festa開催10周年にもあたることから、理事会・事務局とさらなる連携をはかることによりグレードアップしたイベントになるよう企画していく予定です。

来年も是非参加をご検討いただくよう宜しくお願いします。

また、セミナープログラムの活動に興味をお持ちになった方は、事務局にお気軽にご連絡をお寄せください。

【Festa2017】セミナーレポート (K-1)

■泥にまみれる

～富士通の農業クラウド開発プロジェクト～

レポート：PMI日本支部 セミナープログラム 松本 弘明

【セミナー概要】

- 開催期日：2017年11月11日(土) 12:00～13:00
- タイトル：泥にまみれる
～富士通の農業クラウド開発プロジェクト～
- 講師：渡辺 浩司氏
- 講師のプロフィール

富士通株式会社 イノベティブIoT事業本部 Akisai 事業部

【略歴】

- 1978年 埼玉県狭山市出身。
- 2001年 富士通株式会社入社。営業部門、半導体部門、新規事業企画部門に従事。
- 2008年 農業ICT新規事業企画チーム発足メンバーとして、稲作農業法人との4年を超える実証実験プロジェクトリーダーを務める。稲作を中心としたシステム・サービス企画業務を担当。
- 2012年 「食・農クラウド Akisai」サービスを提供。
- 現在は、ICTを活用した農業生産性向上のための活動を通じて、全国各地の農業生産者の支援を行っている。

【はじめに】

Festaの講師は、年明けにテーマが決まった直後にご登壇いただきたい方々を、セミナープログラムメンバー全員でリストアップし、その後個別にアプローチを開始します。私個人的にはIoT技術を様々な分野で取り組んでいる方に是非ご登壇いただきたいと考え、別講師として検討させていただいた「獺祭」の旭酒造より紹介していただいた富士通のAkisai事業のプロジェクト・マネジャーである渡辺様にご登壇をお願いしました。まだIoTという言葉も使われていない頃の2008年からプロジェクトをスタートし、農業にICT活用できるサービスを作るという未知の分野に挑戦する中で、さまざまな経験をされている渡辺様からは今回のFesta2017のテーマにふさわしく多くの気づきを与えていただけたらと思います。講演では実際の農業現場に行き、本当に使える農業クラウドサービスをシステムと現場の実証を繰り返しながら作り上げていった軌跡をお話いただきました。

【講演内容】

2008年から始まった農業ICT実証実験プロジェクト。プロジェクト・メンバーは全くの農業素人のIT開発メンバー。未知への挑戦の始まりは、農業現場へ行くことから始まりました。腰掛けの農業体験ではなく、農業従事者の一作業員として2週間から1ヶ月近くの期間、実際の農業を行いました。そこでみた農業の実態は想像していたものとは違い、牧歌的でも田舎の原風景でもなく、集団生産で効率を求める仕事でした。現場経験をふまえ、ICT適用アプローチを当初仮説から見直し、以下の2点をプロジェクト内で対応しました。1点目は“農業をPDCAサイクルとして捉え、サイクルを回せる実践ワークを農業生産者で行う”こと。2点目は、“農業における匠の技を追い求めるのではなく、農業生産活動における計画・管理系の業務をICT化していく”こと。



■PMI Japan Festa 2017 セミナーレポート

データ振り返りの場を設定し、PDCAサイクルを支えること、問題解決、ファシリテーション技法を農業にも適用する、という非ICT分野での本取り組みが農業現場では非常に価値のあるアプローチとなりました。ここで上がってきた課題や問題をサービス開発に活かしていきました。

圃場センシング・行動センシングなどセンサー技術を使った情報の可視化とそれらデータから判断の助けになる情報提供をサービス化していく過程では、生産者の言ったことがそのまま要件になるとは限らず、言葉の背景にある真の課題の深掘りが非常に重要でした。また、一つの現場で見たことが他の現場で使えるとは限らないため、共通的に使える機能、UIの見極めもさまざまな生産者との実証により確立して行きました。

プロジェクトを通して学んだこととして、未知の分野だからこそすべきことは、現場に飛び込み、「未知」を探究する事、「現場で見たことが全てではない」という視点を持つこと、得意分野（ICT）に拘らず、もてる力を注ぎ込むことでした。未知でも変わらずすべきことは、現場を基点とした仮説モデルの立案、短いサイクルでの仮説検証と見直し、真の課題を探るための深掘（要求開発スキル）を行うことでした。

未知分野への挑戦であっても、これまでの経験が役に立つことも多く、未知だからこそ謙虚に学んでいくことも必要だったという非常に参考になるお話でした。

【講師担当余話】

打合せの際に、農業という未知の分野への業務に不安はありませんでしたか？という質問をしました。回答は、直前のプロジェクトで失敗を経験していたことで、失敗に対する耐性ができていたこと、ICTの普及が進んでいない分野に対する興味が大きかったことか、ら不安はあったがチャレンジしていくことを選んだとのことでした。

失敗を次に活かすという、PDCAをプロジェクトレベルで体現していて見習いたいと思いました。また未知だからといって、これまでの知恵・スキルを活かせないのではなくて、未知でも活かせることが多く、さらに新しい知識が自身の経験に加わった、との言葉を聴いて、変化を恐れずチャレンジしていくことは自身の成長にもつながるのだと感じました。

ご多忙の中、講演をご快諾いただきました渡辺様にこの場を借りて御礼申し上げます。

【Festa2017】 セミナーレポート (K-2)

■『Red Bull AIR RACE CHIBA』

～ 厳格な日本の規制の中、なぜ開催できたのか？～

レポート：PMI日本支部 セミナープログラム 川村 祥二

【セミナー概要】

- 開催期日：2017年11月11日(土) 13:15～14:15
- タイトル：『Red Bull AIR RACE CHIBA』
～ 厳格な日本の規制の中、なぜ開催できたのか？～
- 講師：河野 眞二 氏 (MC：Alee 氏)
- 講師のプロフィール：
株式会社 新創社 代表取締役
株式会社 エア・レースジャパン 代表取締役

【略歴】

- 1974年 大阪市生まれ。
- 2002年2月に株式会社新創社を設立。企業、自治体、スポーツ、音楽、イベントなど様々なジャンルで、事業企画から運営実施まで手掛ける。日本では実現不可能と言われていた国際大会、Red Bull AIR RACEを誘致し、様々なハードルをクリアし大会を成功に収めた。
- 2015,16,17年 Red Bull AIR RACE CHIBAで実行委員長を務める。

■PMI Japan Festa 2017 セミナーレポート

【はじめに】

Festa開催の直前の10月15日、レース最終戦（インディアナポリス）で、日本人の室谷義秀が年間チャンピオンを決めたことは、講演をさらに盛り上げる格好の材料となったことは間違いありませんでした。

しかし、今までにないスタイルでの講演（MCとの講師の2名での対談方式）なので、「いったいどんな進行になるのか、参加者の反応はどうか？」と、企画した側としては実は心配していました。

ところが、そんな懸念は最初の数分で吹き飛びます。アリーさんの軽快なMCと河野さんのポジティブ、かつシークレット情報も含めた臨場感溢れるコメントが、参加者全員の目と耳を60分間釘付けにした講演でした。

【講演内容】

「世界の中でも過密、かつ厳格な航空規制が布かれており、エアレースの開催は絶対に不可能」と言われていた日本。しかも都心でエアレースが開催できるなどということは、誰も想像できなかったと思いますが、河野さんの発想は全く逆でした。

「エアレースはアーバンエリアで開催することに意義があり、それを実現するためには何でもやった。」というのです。

実際に河野さんの経歴をみると、2006年にビジネスの形態をB to BからB to Cに変更されており、その頃から「請負から仕掛ける側」へチェンジし、行政を巻き込むレベルのイベントを数多く手がけておられます。これらの集大成が、レッドブルエアレースとして結実されたのではないかと思います。

講演の中でアリーさんが引き出された、「Yesでなくても、Noでなければ可能性はある、Yesを引き出すためには、Noと言われない状況をひとつずつ組み立てていく」という河野さんの言葉は、まったく納得に値するものですが、エアレース開催に至るまでには、本当に何重ものハードルがあったようです。

たとえば、無線利用については総務省、空域と滑走路利用については国土交通省、海上については海上保安庁と漁協組合、滑走路の保安については消防、会場警備については警察と、考えられる省庁や行政組織との調整が必要だったとのお話がありました。しかも、それぞれの組織は横のつながりを持っておらず、個別に順番に説明して理解してもらう必要があります。よって、その途中で新しい意見が出されれば、再度元の組織への説明を繰り返す、というような途方もないプロセスが必要だったとのこと。

これには河野さんお一人ではなく、スタッフの皆さんも対応されたようですが、「(精力的な)河野さんですから、スタッフはついて行くのが大変なのでは？彼らのモチベーションはキープできたのでしょうか？」という会場からの質問も絡めて考えてみました。

河野さんからは、「自分で無理だと判断しないこと、限界を決めるのは自分ではなく相手である」、「スタッフに対し『Noと言われない状況を作る』と言い続ければ、彼らは自分についてきてくれるので、その点は心配していない」と、自信をもって回答されていました。また、講演後の交流会でスタッフの方にも直接確認しましたが、「そんな河野さんだから、『やってやろう』という気持ちになります」との回答。トップのあべき姿勢として見倣わなければならないと感じました。



■PMI Japan Festa 2017 セミナーレポート

もう一つ、省庁や行政組織を相手とする場合に限定した話ではないと思いますが、交渉を進めるコツとして、非常に興味深いと感じたコメントを紹介します。

- 自分のアイデアを通すためには、「相手の立場で考える」。そのためには「相手にとってのメリット」をしっかりと伝える。
- 「説得」しようと思わず、「協調」する。
- 「交渉」しようと思わず、「相手をどうやって巻き込むか」を考える。

本当にエネルギッシュな河野さんと、その魅力を存分に引き出してくれたアリーさんは絶妙なコンビでした。

「既成概念にとらわれないこと。情熱をもってチャレンジすること」を実践された数々の貴重な経験を拝聴するうちに、こちらもどんどん「巻き込まれていく」と感じると同時に、明日からの自らの業務に取り入れられるポイントが満載の講演内容でした。

【Festa2017】セミナーレポート (K-3)

■富士フィルムのイノベーション

レポート：PMI日本支部 セミナープログラム 栗田 悠毅

【セミナー概要】

- 開催期日：2017年11月11日(土) 14:30～15:30
- タイトル：富士フィルムのイノベーション
- 講師：柳原 直人氏
- 講師のプロフィール：
 - ・昭和61年3月 京都大学大学院工学研究科前期課程修了。
 - ・昭和61年4月 富士写真フイルム株式会社（現富士フイルム）入社。材料研究に従事。
 - ・平成24年6月よりR&D統括本部 有機合成化学研究所長
 - ・平成27年6月 執行役員就任、R&D統括本部長および高機能材料開発本部副本部長を兼務。
 - ・平成28年4月より経営企画本部にてイノベーション戦略企画部を管掌、現在に至る。

【はじめに】

Managing Uncertainty という今回のFestaのテーマから思いついたのは、一時期世間をにぎわしていた「エボラ出血熱の薬として富士フィルムが開発したアビガンが使用された」というニュースでした（正確には富山化学工業）。また、化粧品のASTALIFTもCMで見た時には、フィルムはそんなに応用できるものだと驚いたことも記憶にありました。

そこで、富士フィルム株式会社のHPを 拝見したところ、医療関連事業については1980年代から既に取り組みされており、このようなイノベーションは一朝一夕で達成したものではないということを知りました。R&D統括本部長として掲載されていた柳原氏のコメントの中でも、「我々はオープンイノベーションの初学者ではない」という記載があり、ご自身も先頭に立ってオープンイノベーションを推進され、会社としても文化として定着しているものと推察しました。イノベーションについて、意識を持ちつつも悩んでいるリーダーや管理者も多いと考え、そういった方々の一助になればとい



■PMI Japan Festa 2017 セミナーレポート

うことで、柳原氏に登壇をお願いすることとしました。

【講演内容】

講演開始後、壇上に留まることなく、すぐ参加者のいる客席へ下りて話を始められた柳原氏。そんな柳原氏の講演は、スタイル自体も Festaにとってはイノベーションであり、もちろん内容も大変興味深いものでした。

まずは、多くの方が興味を持っているであろう、フィルム業界に起こったデジタル化の波という危機にどのように対応したかという話から始まりました。「富士フィルム社の第二の創業」と題して紹介されたのは、同社の「強み」を認識することでした。フィルムを作るには、さまざまな技術が使われていて、例えば活性酸素を抑える技術や、成分を浸透・吸収させる技術が化粧品の商品化につながっていったというものです。

次にイノベーションそのものに話は移ります。ここからは参加者のみなさんへの質問も織り交ぜられ、講演の臨場感が増していきました。モノづくりとコトづくりというテーマをもって、五・七・五の俳句について、以下のどちらがイノベティブかという問いが発せられました。

A：五・七・五の枠組みを壊して、例えば三・八・六などにしてしまう。(既成概念を壊す)

B：五・七・五は壊さずに新しいことをする。(既成概念を守る)

会場では、Bに手を挙げる方が若干Aを上回っていました。答えとしては、両方あるのですが、極端に単純化すると、モノ作りはB、コト作りはAに分類できます。スマホを例にとると、価値の本質はスマホの中にある形のないアプリケーションにあるが、消費者がお金を払っているのはスマホという形のあるモノである。イノベーションが起きた時に、モノを持っている方が強いということでした。そのため、日本は

モノづくりを諦めるべきではありません。富士フィルム製品でも、ユーザーが既存の製品(モノ)を新しい使い方(コト)で新しい価値が創出された例があり、紹介していただきました。

最後に、柳原氏が入社後に約30年間考えてきたという富士フィルムが存在する意義についてお考えを聞かせていただきました。例えば、アビガンに代表されるヘルスケア事業をなぜやっているのか。ただ成長分野だからやっているのか。それならば富士フィルムがやる意味は何なのか。富士フィルムはこれまで、写真を通して、さまざまなものを「記録」してきました。これは単なる「記録」ではなく、ストーリーを伴った人間の「記憶」。ヘルスケア事業は人の遺伝子を通して人のストーリーを守っていくことにつながる。つまり、富士フィルムの存在価値は、「記憶をつないでいくイノベーション」にあるというのが現在の答えであるとのことでした。そして、1日に小さなこと一つでも変えていけば、1年間で365個のものを変えることができる。簡単なことではないかもしれないが、誰でもコツコツとイノベーションを起こすことができるというメッセージで、講演を締めくくられました。

【担当余話】

柳原氏から会場内を歩き回ってインタラクティブに講演をしたいという打診をいただいたのが当日の4日前でした。Festaでは前代未聞でしたが、機材などの制約は特にないので、ご希望に沿ってご講演をいただきました。まさか殆ど演台に立たないで講演されるとは思ってもみませんでした。参加者の皆様も臨場感をもって文字通り参加することができ、ご満足いただけたものと確信しています。

柳原氏の講演は、私が是非拝聴したいと思っていたイノベーションの実例やご自身の姿勢・考えがあふれたものでした。実践につなげられるものを日常の中に探してみたいと思います。

■PMI Japan Festa 2017 セミナーレポート

【Festa2017】セミナーレポート (K-4)

■世界初を生み出すセブンドリーマーズ ～全自動衣類折りたたみ機「ランドロイド」への挑戦～

レポート：PMI日本支部 セミナープログラム 近藤 昇久、城島 孝明

【セミナー概要】

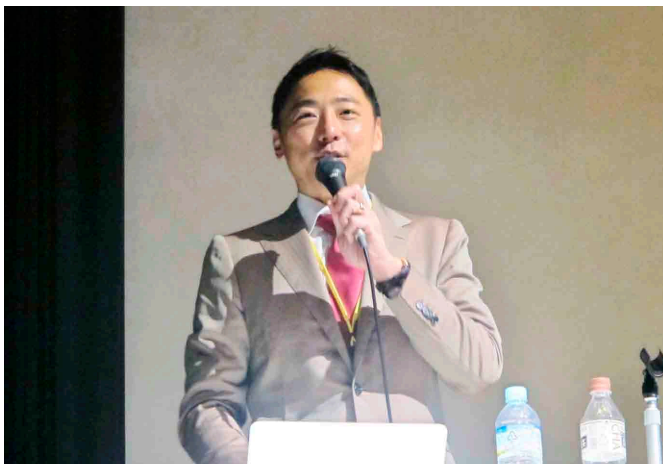
- 開催期日：2017年11月11日(土) 15:45～17:15
- タイトル：世界初を生み出すセブンドリーマーズ
～全自動衣類折りたたみ機「ランドロイド」への挑戦～
- 講師：阪根 信一 氏

□講師のプロフィール：

セブン・ドリーマーズ・ラボラトリーズ(株) 代表取締役社長

【略歴】

- 1971年 兵庫県芦屋市出身。
- 1999年8月 米国デラウェア州 University of Delaware 化学・生物化学科 博士課程修了。
- 2008年7月 スーパーレジン工業株式会社 代表取締役社長就任（現職）。
- 2014年7月 seven dreamers laboratories 株式会社設立、代表取締役社長就任（現職）
- 2016年4月 セブン・ドリーマーズ・ランドロイド株式会社設立 代表取締役社長就任（現職）。



【はじめに】

PMI Japan Festa にご登壇いただく講師は、さまざまな領域の最前線でご活躍されていらっしゃる方をお願いしていますが、Festa 2017のキーワード「不確実性」、「未知の領域」の下、そのキーワードに特に相応しい方を探していたところ、某雑誌でSeven dreamers laboratories社が開発しているランドロイドの記事を見つけました。Seven dreamers laboratories社の、今まで誰も取り組んでいないものに敢えて挑戦していくという姿勢は、まさに「不確実性」や「未知の領域」といったキーワードを体現しているものと考え、代表取締役社長の阪根様にご講演を依頼しました。

阪根様はもともと学術分野の研究者で、そこからビジネスの世界へ転身されたというバックグラウンドをお持ちであり、その点でも阪根様ご自身の「未知の領域」への挑戦を感じました。本講演では、Seven dreamers laboratoriesが挑戦してきたイノベーションについて、裏話なども交えつつ興味深い講演をいただきました。

【講演内容】

Seven dreamers laboratoriesは「世の中になかったモノ」、「人々の生活を豊かにするモノ」、「技術的ハードルが高いモノ」という3つのクライテリアを満たすイノベティブな製品の研究開発を行っている、社員70名ほどの日本ベンチャー企業です。既にカーボン・ゴルフシャフトとナステントが商品化されており、2018年には、全自動衣類折りたたみ機ランドロイドが発売される予定になっています。

カーボン・ゴルフシャフトは既存製品の性能改良、ナステントは既存製品のコンセプト改良と考えられますが、ランドロイドは日本発の白物家電のイノベーションとしては初めての製品になると言われています。

開発に着手するきっかけは「洗濯機をたためる機械が欲しい」というご家族との会話だったそうですが、その当時の2005年はAIといった概念も無くロボットアームも1本で

■PMI Japan Festa 2017 セミナーレポート

100万円程度と高いため、社内で初めて説明した際は非常にネガティブな反応だったそうです。しかし、反対されればされるほど良いテーマであるとの思いを強め、2005年に開発に着手したそうです。9年後の2014年にプロトタイプが完成するまでにさまざまな困難に直面しましたが、その中でも洗濯物を畳むという工程が非常に複雑でチャレンジングだったそうです。洗濯物が何であるかを画像認識し適切に畳むという、人間であれば簡単にこなす作業も、機械にとっては非常に難しい作業であり、開発を進める上で非常に高いハードルだったそうです。しかしながら、研究者の努力も実り、工程を一つ一つ分解して研究していくことで、ブレークスルーがあり製品化の目処が立ったとのこと。将来的にはオンライン・クローゼットや衣類コンシェルジュとしての機能も付与したいとのことでした。

また、Seven dreamers laboratoriesでは研究チームのありかたについても非常に大事にしていることがあります。例えばランドロイドは、今までになかったコンセプトの家電であるため、文字通りゼロからの開発を通じて製品化につながっていますが、研究開発初期段階では、技術者の得意分野・専門性に捉われることなく、比較的小さなチームで役割も明確にせずさまざまなことに挑戦させていたそうです。それによりチーム一丸となって研究に取り組むことが可能になり、さまざまな課題に対しても臨機応変に対応できているが、WBSを作成し進捗管理をきちんとすることで納期を絶対に遅らせないようにしているとのことでした。

プロトタイプが2015年のCEATECで公開されて以来、ランドロイドは日本国内のみならず海外でも広く認知されることとなり、2017年には世界最大の家電ショーである

CES2017にてデモンストレーションを行ったとのことでした。現在、東京表参道にランドロイド・カフェがオープンし一般の方々もランドロイドを体験できるようになっています。

【講師担当余話】

Festa開催の1か月ほど前、ご講演の打合せを兼ねて芝公園近くのSeven dreamers laboratories社を訪問し、阪根様のお話を直接拝聴する機会がありました（そのときの様子はPMI日本支部ウェブサイト https://www.pmi-japan.org/topics/festa/Festa2017_yokoku.php をご覧ください）。ウェブサイトへの掲載では省略しましたが、阪根様が研究者からビジネスの世界に転身された理由もお話しくれました。アメリカで研究をされていたころは大学で教授になりたいと思っておられたそうですが、だんだんレベルの高い学会で発表するようになるにしたがって、他にも驚くほどの天才的な研究者がたくさんいて、研究の世界では自分は到底勝てないと思ったそうです。しかしながら、研究者として勝てない人はいるものの、阪根様ご自身の強みにも気づき、研究者としての経験に基づく技術に対する知見とコミュニケーション力を活かして研究開発型製造業に参入することを決断されたそうです。

「競合社が居るところにいても、いずれは価格競争になってしまう。競合が居ないところで圧倒的な技術力でぶっちぎれば絶対負けない」というSeven dreamers laboratoriesの会社としての取り組み方は、まさに阪根様ご自身の生き方を反映しているもので感銘を受けました。そのような阪根様が率いるSeven dreamers laboratories社が現在開発中という新製品も、どのようなイノベーションを起こしてくれるのか楽しみです。

■PMI Japan Festa 2017 セミナーレポート

【Festa2017】セミナーレポート (K-5)

■ UPDATE MOBILITY

～自動運転に挑むSBドライブの取り組み～

レポート：PMI日本支部 セミナープログラム 城島 孝明

【セミナー概要】

□開催期日：2017年11月12日(日) 9:30～11:00

□タイトル：UPDATE MOBILITY

～自動運転に挑むSBドライブの取り組み～

□講師：上村 穰氏

□講師のプロフィール：

SBドライブ株式会社 取締役、ソフトバンク株式会社 経営企画本部 副本部長、ソフトバンクユニバーシティ 認定講師 (PM研修担当)

【略歴】

- 広告代理店、インターネットベンチャーを経て2003年日本テレコム（現ソフトバンク）入社。
- 2007年PMP取得
- 2016年SBドライブ設立に携わり取締役に就任



【はじめに】

近年、電気自動車（EV）や自動運転車、人口知能（AI）に関する話題を見聞きする機会が増えています。このような社会的背景を踏まえ、Festa2017では自動運転に関する講演を取り入れたいと考えていました。本公演では、ソフトバンクとヤフージャパンが資本提携しているSBドライブ株式会

社の自動運転自動車の開発に関して、プロジェクトマネジメントの視点も交えてご講演いただきました。

【講演内容】

①SBドライブ社について

SBドライブ社は2016年4月に設立されたソフトバンク社と先進モビリティ社の合併会社であり、現在はソフトバンクおよびヤフージャパンから資本提携を受け研究・開発を進めています。動力系（走る・曲がる・止まる）に関しては、東大初のベンチャー企業であり、国内自動運転のトップランナーである先進モビリティ社が担当しています。一方で、それ以外の運転手の運行管理業務（運賃の収集や乗客の安全確認など）をSBドライブ社が担当しています。オリンピックが開催される2020年での自動運転実用化に向けて研究開発を進めています。

②SBドライブ社が目指す自動運転について

自動運転にはLevel1から5までの定義があります。現在ではLevel2の自動車が市販されていますが、SBドライブ社では全ての操作を自動で行うLevel4、無人による自動運転の実用化を目指しています。なお、Level4では非常時に対応できるように有人による遠隔監視を行います。

第五世代通信網5Gが東京オリンピックの頃に立ち上がり2020年中盤には実用化されると言われていますが、5Gの用途で代表的なものが自動運転であり車と車の間での通信が可能になります。ICT（Information and Communication Technology）サービスの提供がSBドライブ社の役目だと考え、5G通信技術（車車間通信による衝突回避など）・ビッグデータ処理（交通状況の確認）・AI（画像処理による車内状況の確認）の3つをコア・テクノロジーとして運行管理システムの開発を含め、現時点では4G LTEで実現可能なことに挑戦しています。

一方で、自動運転バスの実現に向けては、交通事業者によ

■PMI Japan Festa 2017 セミナーレポート

る運行管理体制の構築（例えば道路に磁気マーカーを埋め込むことで、GPSよりも高精度な位置特定が可能になる）や行政の取り組みも非常に重要になりますが、行政に関しては、日本の道路交通法は今後整備が必要ではあるものの、Level4の自動運転に向けて前向きに検討しているとのことでした。

さらに、事故の発生頻度およびその影響度の低減に向けて永続的に取り組む予定であり、自動運転時に発生する事故の補償のあり方についても保険会社と議論を進めています。

③自動運転バスを選択した理由

自動運転バスは、出発地・目的地・路線が明らかとなっているため自動運転の設定がし易いと言うメリットだけではなく、規定路線を走るため情報収集が容易で、かつ学習効果も高く、ちょっとした変化にも対応し易いと言うメリットもあることから、自動運転バスの開発をスコープとしました。

バスの運行費用の60%が人件費ということが交通事業者とのコミュニケーションを通じ確認できていて、全国の7割の路線バス会社が赤字、ドライバー不足、自治体による赤字補填が起きているのが現状です。自動運転バスは、バス自体やシステムについて価格は通常のバスよりも高くなるかも知れませんが、人件費を削減できる分、採算を取ることにも可能です。採算が取れなかったために、やむなく廃線となったバス路線を復活させることがSBドライブ社の使命であり、全国の交通事業者・自治体・企業などが顧客になると考えています。

④プロジェクトの状況とマイルストーン

国内の4地域で協定を結び、2018年の公道での実証実験に向けて段階的レベルアップを図っています。その他にも、40ほどの自治体に対して誘致活動を続けているため、情報共有できるようコンソーシアム的な組織を作るための準備を進めています。現在は、実証フェーズに入りつつあり、今年3月に閉鎖空間でのLevel3の実証実験(走行性能評価)を行った後で30人程度にモニター調査を行ったところ、乗車前は不安が大きかったものの、試乗後は安心感が増えていることが明らかになりました。今後もさまざまな地域で試乗会を行っていく予定です。

【講師担当余話】

実際に東京大学の柏の葉キャンパスに訪問して自動運転バスの試乗することができたのは非常に良い経験でした。最後に紹介いただいた動画を見て、自動運転の技術により過疎化が進む地域の住民の方々、あるいは高齢者の方々に公共路線バスによる移動手段を提供するだけではなく、ヒトとヒトのコミュニケーションの活性化にもつなげることができるというアイデアに非常に感銘を受けました。質疑応答ではソフトバンク社内のお話も伺うことができ、非常に貴重な講演だったと感じています。

上村さま、ご講演本当にありがとうございました。2020年の自動運転の実用化がとても楽しみです。

【Festa2017】セミナーレポート (K-6)

■変化し続ける組織のプロダクト戦略史

～ 経理の自動化から始まったビジネスプラットフォームへと続く道～

レポート：PMI日本支部 セミナープログラム 大島 康宏

【セミナー概要】

□開催期日：2017年11月12日(日) 11:15～12:15

□タイトル：変化し続ける組織のプロダクト戦略史
～ 経理の自動化から始まったビジネスプラットフォームへと続く道～

□講師：鈴木一也氏

□講師のプロフィール：

freee株式会社 プロダクト戦略本部長

【略歴】

- 熊本県出身、大阪大学大学院情報科学研究科修了
- 2006年 株式会社ワークスアプリケーションズ入社。入社当初はコンサルタントとして配属されるがエンジニアに転身。連結会計、管理会計、固定資産管理など会計ソフトを中心としたERPパッケージの開発に従事。
- 2013年 freee株式会社入社。エンジニア、UXデザイナー、エンジニアマネージャーを経てプロダクト戦略本部を立ち上げ。現在に至る。

【はじめに】

会計処理というのはすべて企業にとって行わなくてはならない業務であり、特に創業まもない企業にとってはノウハウも少ないことから、多くの労力もしくは金銭的なコストがかかるものになります。その業務から解放してあげることで本業に注力させてあげたい。そのような想いがfreeeのプロダクトには込められています。

AIを活用した自動化というのは、今後の世の中のキーワードになっていくものですが、これはfreee社のプロダクトでも重要な位置を占めています。会計仕訳処理の自動化から会計処理全般の自動化に広げていきCFOの役割を担うこと、それをAIがデータ処理していくことで、実現していきます。



【講演内容】

「スモールビジネスに携わるすべて人が創造的な活動にフォーカスできるようにしたい」。経営を進めていく中で発生する会計処理など面倒なことからユーザを解放して、本業にフォーカスさせることを会社のミッションとしているということから講演が始まりました。ビジネスの立ち上げ（会社設立freee、開業freee）、運営（クラウド会計ソフトfreee）、そして会社を育てる（人事労務freee）というところまでカバーするような製品をリリースしています。

freee社が実現したいコンセプトとして以下の3つがあります。そのコンセプトを達成するためにfreee社のプロダクトが開発されてきました。

1) 簡単・自動化

非創造的かつ煩雑な作業を簡略化、さらには人手を介さない自動化へと繋げることで、本業にフォーカスできる環境を整える。

2) バックオフィス最適化

会計ソフトにとどまらず、中小企業の経理業務全体の効率化を考えた設計思想。ユーザの業務効率化ニーズに応えていく。

■PMI Japan Festa 2017 セミナーレポート

3) クラウド完結型社会

必要な業務やデータ管理を全てリモートで対応できるクラウドで完結させることで、中小企業の生産性を劇的に改善し、経営の見える化を実現。

簡単・自動化のために、入力作業の再定義を行いました。金融機関、クレジット会社などWeb上にデータがあるものについて、人工知能によりデータの自動取り込みと自動仕訳を行って入力処理を簡略化しました。ここは今までのシステムの「入力作業を効率化するには？」ではなく、「入力作業をなくすためには？」という発想のもとに開発を進めてきました。

バックオフィス最適化のために、手作業・Excel・別ソフトが乱立している各業務処理（売上、仕入・支払、立替経費、給与・労務）について、全てfree社のソフトだけで完結できるようにしました。

『NASAの清掃員にあなたの仕事は何ですかと質問をしたところ、私の仕事はロケットを飛ばすことです。掃除をすることで人類を月に送ることに貢献しています』というような回答が返ってきたエピソードがあります。Free社の業務システムも同様に、私の仕事はデータを入力していますというようなパンチャーの役割ではなく、必要なデータをインプットして経営を改善するために働いているという回答ができるようにと考えています。そのためには入力のし易さだけではなく、free社のシステムを使っていること自体がクールであることも必要と考えています。

freeは定型業務をこなすためのツールではなく、経営分析をサポートし、本業を成長させるためのツールとなって行くと、鈴木氏は語ります。freeを使うことで、データがクラウド上に蓄積され、人工知能がデータを分析して意思決定に必要な情報を導き出します。それはCFO/CHOの役割を担い、ビジネスに役立つ価値を提供していくことになります。

プロダクト開発を進める中で発生した壁について。

freeを活用していくためにはネットバンクの利用は必須となるのですが、なかなか普及が進まない、使い方がわからないという話が想定以上に多くありました。その対応として、ネットバンクと提携して普及を進めるための取り組みや、システム画面の中に説明案内を表示させるなどしてきました。クラウドに対する漠然とした安全性の不安や拒否感というもの、今ではかなり減ってきましたが、ビジネスを開始した4

年前は大きな壁でした。クラウドを利用した方が安全であるという啓蒙を進めていく、実際に使っている利用者の声を伝えるという地道な活動が必要になりました。その他に、今ある業務フローを変えたくないという声や、アイデアを模倣されないように特許戦略を使って守ることなど、これらの外部要因をいかにコントロール可能なものに変えていくかという観点が必要でした。

開発コストと機能の壁というところでは、専門家向けの機能を取り込み、会社の成長期にあわせたプロダクトに拡大していく中で、いかに必要な機能に絞り、「やらない」という決断をするかが重要になっています。

前例のない予測困難な壁という点については、今年の4月にリリースした会計業務から申告業務まで一気通貫で行える「クラウド申告free」を例にとってお話しします。少なくとも日本には今までにない開発となるため、初期の仮説通りには進まない、それは外れる前提ではあるのですが、そうなったときにいかにPDCAを回す体制を築いていくかが大事です。新しいチャレンジは予測が難しいので、そこはいかに割り切って前に進む決断ができるか、そして、リスクを減らすためのコストをどのくらいかけるべきかを考えながら進めていく必要があります。

最後にこれからやっていきたいこととして、free Smart Business Platformというインフラ基盤を作成し、freeを使用する利用者同士が繋がって、経営効率化、取引効率化、機会創出といった会計ソフトだけでなく、実益のあるプラットフォームを目指していきます。

【講師担当余話】

フィンテック分野の講演者を探したいという話を聞き、スタートアップ企業として会計分野で注目を浴びているfree社にオファーをかけました。

free社の受付での短い待機の時間に、中途採用希望者と思われる方が何人も入室し、スタートアップ企業として勢いのある会社という印象を受けました。オフィスに入ってみると、カフェスタイルのオープンなスペースに和室のような場所があったり、卓球台があったりで、そういった空間で社員が思い思いに仕事していました。

「何故働きがいのある会社を選ばれるのですか」という質

■PMI Japan Festa 2017 セミナーレポート

問を鈴木氏にしたところ、「会計をやりたい人が集まってきている。会社のやるべきことと、個々人のやるべきこととの方向性が一致しているからでは?」という回答でした。

打ち合わせの際にいただいたミネラルウォーターのラベルには、ホームページにも記載されている5つの価値基準が印

字されていました。

同じ目的や価値を共有し、全社員が同じ方向性でプロダクト開発を行っていくということが、社員数400人に至った現在でもなお素晴らしい成長を支えている源泉なのだと感じました。

【Festa2017】セミナーレポート (K-7)

■日本発の民間月面探査チーム「HAKUTO」の挑戦とレース後の展望

レポート：PMI日本支部 セミナープログラム 鬼束 孝則

【セミナー概要】

- 開催期日：2017年11月12日(日) 13:15～14:15
- タイトル：日本発の民間月面探査チーム「HAKUTO」の挑戦とレース後の展望
- 講師：袴田 武史氏
- 講師のプロフィール：

株式会社ispace 代表取締役& ファウンダー、
HAKUTO 代表

【略歴】

1979年生まれ。米ジョージア工科大学大学院で航空宇宙工学修士号を取得後、経営コンサルティング会社を経てispaceを創業。人類が宇宙で生活圏を築き、宇宙と地球が共存する世界を構築するため、宇宙ロボット技術を活用した民間宇宙事業を推進中。2010年からGoogle Lunar XPRIZEに「HAKUTO」を率いて参戦中。

【はじめに】

Google Lunar XPRIZE、それはGoogleのスポンサーのもと、XPRIZE財団によって運営される世界初の民間による月面探査レースです。2010年末の参加登録時には34チームでスタートしたレースが現在5チームまで絞られており、その中に日本のチーム「HAKUTO」がファイナリストとして残っています。

そんなことを知ったのは今回のPMI Japan Festa2017で講師選びをしている中でネットを検索した時のことでした。その時に感じたことは、「これだけ話題性のあるニュースを



知らなかったのは私だけなのか?」というちょっとした恥づかしさに似た気持ちでした。

しかしこれをPMI Japan Festa 2017の候補として取り上げた際、企画メンバーの全員が知らなかったことから、本講演を実現させ知名度を上げたいという気持ちがさらに湧きあがってきました。これまでPMI Japan Festaでは知名度は低くとも現場の第一線で活躍されている方々にお声がけし講演いただくことで、ささやかながら知名度アップのお役に立ってきたのですが、このHAKUTOの活躍はまさにFestaの講演に相応しい内容だと考え、ispace社へ慎重にアプローチを行い、講演の実現にこぎつけました。

講演に至るまで、講師の袴田様はもとよりispace社の秋元様や高橋様などお忙しい中でのご支援に深く感謝しております。

■ PMI Japan Festa 2017 セミナーレポート

【講演内容】

人類初の月面探査レース「Google Lunar XPRIZE」に参加している日本の民間月面探査チーム「HAKUTO」を率いる袴田氏による講演で、レースの概要や狙いをはじめ、HAKUTOのチーム構成やチームが開発を進める月面探査ローバー”SORATO”の特徴、そして打ち上げや月の着陸地点などのミッションについてご紹介いただきました。

Google Lunar XPRIZEは、Googleがスポンサーとなり、XPRIZE財団によって運営される、民間組織による月面無人探査を競う総額3,000万ドルの国際賞金レースです。ミッションは、月面に純民間開発の無人探査機を着陸させ、着陸地点から500m以上走行し、指定された高解像度の動画や静止画データを地球に送信すること。1位のチームには賞金2,000万ドル、2位のチームには賞金500万ドルが与えられます。現在、SpaceIL（イスラエル）、Moon Express（アメリカ）、Synergy Moon（インターナショナル）、TeamIndus（インド）、HAKUTO（日本）の5チームがレースの最終フェーズに参加しています。またレース後の展望として、「宇宙を人類の生活圏にする」をビジョンに掲げる ispace の、月面資源開発の事業の展望についてもご紹介いただきました。

冒頭に袴田氏の生い立ちをご紹介いただきましたが、問題意識を持ちアメリカの大学へ進むことを決心したが、日本で研究室を訪問した際、一つひとつの細かな作業をしている光景を見て自分は宇宙船を作りたいという志から、システムを統合し一つのプロダクトを作って行くシステムズ・エンジニアリングのような考え方が必要だと思ったというお話に、プロジェクト全体を見渡すことの重要性を改めて感じさせられました。

また製品を作り上げる時には決して技術的なスペックを決めてはだめで、メリットがどのように出るのかを考え、経済的な指標を初期段階から取り入れ、さらにこの世界では技術

者だけでは成り立たず、経営と資本が必要になるという考えに至ったという経営者的な視点の必要性も語られていました。

そしてご本人自らもコンサルタントの知識と経験を経て、かつ、それぞれの分野の知識を有するメンバーをプロジェクトに引き入れながら進めていく手法は一般企業では味わえないエキサイティングなものでした。

Google Lunar XPRIZEは賞金レースを通じてイノベーションを起こすことを目的としていることや、Team HAKUTO についてのお話、その後、現在変革期にある宇宙産業の状況、そして最後に ispace 社の取組についてご説明いただきました。

【講師担当余話】



講演後には多くの参加者が列をなして名刺交換をする場面があり、皆さんが HAKUTO のファンとなり ispace 社の取組に興味を持って応援いただけることを想像させる一コマでした。

袴田様の招請を担当した筆者としては、今回の講演を聴講された方々の想いと同等に Team HAKUTO が2018年3月末までに月面に着陸し、ミッションを大成功させることを願ってやみません。目指せ No.1、頑張れ HAKUTO !!

■PMI Japan Festa 2017 セミナーレポート

【Festa2017】セミナーレポート (K-8)

■インドネシア・ジャカルタ市内での高速道路建設工事 ～落下傘部隊の奮闘記～

レポート：PMI日本支部 セミナー委員会 豊田 光海

【セミナー概要】

- 開催期日：2017年11月12日(日) 14:30～15:30
- タイトル：インドネシア・ジャカルタ市内での高速道路建設工事

～落下傘部隊の奮闘記～

- 講師：大西 陽子 氏

□講師のプロフィール：

株式会社大林組 土木本部 本部長室 企画課長

【略歴】

- 1981年兵庫県出身。1995年 株式会社 大林組入社 入社以来、ダム現場5年、地下工事現場3年など、主に土木現場で勤務。その後台湾の新幹線軌道工事を経験。
- 2012年 インドネシアの首都ジャカルタのタンジュンプリオク・アクセスロードE2A建設工事現場の工事長として、子連れで赴任。現場管理および現地スタッフの指導に従事。
- 2015年 同現場で工事全体を監理する所長に任じられ、約70名のスタッフを率いて工事の安全・品質・工程・原価管理と多岐に渡る現場業務を統括監理し、2016年11月の竣工を迎える。財団法人エンジニアリング協会 エンジニアリング功労者賞（国際貢献部門）受賞。日経WOMAN「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2017」ドボジョキャリア開拓賞受賞。日本建設業連合会 第二回けんせつ小町活躍推進表彰「トップランナー賞」受賞。

【はじめに】

Festaの講師は、年明けにテーマが決まった直後、ご登壇いただきたい方々を、セミナープログラムメンバー全員でリストアップし、その後個別にアプローチを開始します。私個人的には女性で活躍されている方に是非ご登壇いただきたいとの思いから、「日経Woman of the year」の受賞者の方々



に注目しています。女性がまだまだ少ない土木分野で、しかもインドネシア・ジャカルタで高速道路を建設するという大プロジェクトで、工事現場の工事長を務められた大西様のご経験は、『『Managing uncertainty』～未知の領域においても志高いプロジェクト・マネジャーに～』という今年のテーマにたくさんのヒント、気づきをお話いただけたらと思います。ご登壇をお願いしました。

ご講演ではインドネシアでのプロジェクトで工事長として携わったご苦労と完成までの軌跡をお話いただきました。

【講演内容】

インドネシア・ジャカルタ市内での高速道路建設工事について、

- 工事概要
- プロジェクトの問題とその複雑化
- 問題への対応と成果
- 落下傘部隊が学んだこととは

という4つの項目についてご説明いただきました。ジャカルタが抱える最大の問題・交通渋滞を緩和し経済効果を高める目的で新規高速道路を建設する事業において、大林組は港に接続する最大工区（本線1.92km ランプ2.68km）を受注

■PMI Japan Festa 2017 セミナーレポート

し2012年1月プロジェクトがスタートしました。プロジェクト開始前から、タイトなスケジュールと厳しい予算内での人員確保の難しさ、複雑な形状のY字型橋脚の施工での技術的課題の存在、開始後には用地買収の遅れや支障施設や地下埋設物などの移設の遅れ、設計図面の問題、多くの追加・変更工事が発生、ステークホルダーとの調整、社会情勢の問題（好景気で賃金が高騰、ガソリン補助金の廃止等）など、当初の問題からさらに外的要因、内的要因が加わり問題は複雑化・肥大化し、プロジェクトは負のスパイラルへとまっぴらしていきます。

プロジェクト開始から1年後、当初5名だった日本人は15名に増員され、さまざまな施策を打ち、立て直しが行われます。日本人、インドネシア人との役割・責任の最適化、管理システムの再構築（人事制度の見直し、就業規則、給与テーブルの見直し、フローチャート作成等）スタッフへの教育、指導の徹底、コミュニケーション不足の解消（インドネシア語での打合せ実施等）などさまざまな試みが行われ、最終的に2017年4月に全線開通の日を迎えることができました。

限られた時間では語りつくせない試練やご苦労の連続だっ

たことは計り知れません。問題解決へのアプローチについてとても参考になるお話が多かったので、もっと詳しいお話を聴きたいと思いましたが、海外プロジェクトでは現地に根付き、現地の文化、慣習への配慮、地域特性に合わせた組織編成やマネジメントが非常に重要だと強く感じました。

【講師担当余話】

打合せの際に、小さいお子さんとの海外赴任は大変だったのでは・・・と質問したところ、日本でのワンオペ育児より、インドネシアではメイドさんがいて、家事・育児を手伝ってもらえたり、まわりが協力的だったので何とかできましたよ、との答えが返ってきました。インドネシアで子供に見せられるものが残り社会貢献ができたことが良かったとご講演の最後に仰っていたのが印象的でした。ドボジョのキャリアについて、「どこに行っても何とかできる、やればできると思ってやってきました」と常にpositiveなところを見習いたいと思いました。

ご多忙中、ご講演をご快諾いただきました大西様にこの場を借りて御礼申し上げます。

■部会紹介シリーズ

【部会紹介シリーズ】 その6

■ステークホルダー研究会

ステークホルダー研究会 代表 河野 竹敏

■はじめに

「ステークホルダー研究会」は、プロジェクト・ステークホルダー・マネジメントに対する研究を行う研究会として、2016年に活動を開始しました。

PMBOK®ガイドをもとに、ステークホルダー・マネジメントを行うために必要なソフトスキル、ハードスキルを研究し、メンバーがプロジェクトの現場でステークホルダー・マネジメントをより良く行うためのコツや、ツールを体得することを目的としています。

■これまでの研究成果と活動

研究テーマとしてPMBOK®ガイド プロジェクト・ステークホルダー・マネジメントをもとに、

- ステークホルダー登録簿にあげておくべきステークホルダー情報（ステークホルダーの専門分野や、プロジェクトに対する興味など）
- PMBOK®ガイド 第6版のプロジェクト・ステークホルダー・マネジメントに新たに登場した「ステークホルダー・キューブ」と従来からあるグリッドについての比較と活用方法

等の研究を行い、その成果を「PMI日本フォーラム」にて発表しています。

また、「ステークホルダー・キューブ」と従来からのツールである「グリッド」についての比較と活用方法について、研究会メンバー以外のプロジェクト・マネジャーにも理解していただくことを目的として、2017年11月には本研究会主催のセミナーを開催しました。

■今後の活動

2018年以降も、PMBOK®ガイド 第6版のプロジェクト・ステークホルダー・マネジメントの内容について研究していきます。なお、2018年はステークホルダー・マネジメントを行う上で実践活用できるツールの分析、検討として、プロジェクト・ステークホルダー・マネジメントの実行プロセスである「ステークホルダー・エンゲージメントのマネジメント」と、監視・コントロールプロセスである「ステークホルダー・エンゲージメントの監視」における実践的なツールについて検討・研究を行う予定です。



■部会紹介シリーズ

■ステークホルダー研究会の雰囲気

すべての社会活動は人や組織との関係を構築したうえで活動を行っています。プロジェクトのみならず、地域の活動や、趣味などの活動などにおいてもステークホルダーは必ず存在し、ステークホルダー・マネジメントを行っています。

そのため定例会では、PMBOK®やプロジェクトの話題だけではなく、普段の生活の中でのステークホルダー・マネジメントについてのディスカッションも自由に行っています。

そのため、多忙な時間を離れて、プライベートの話で盛り上がることもでき、定例会は終始楽しい雰囲気です。

なお、研究会メンバーに聞いてみると、入会して定例会に参加すればステークホルダー・マネジメントの知識が得られるというわけではないようです。

研究会に入ることによってステークホルダー・マネジメントについて意識を持ち、業務や普段の生活におけるステークホルダーのマネジメントについて自ら調べたり分析したうえで、定例会に参加し、互いに共有して協議することで、スキルアップできているといった人が多いようです。

■おわりに

研究会というと少し堅苦しく感じるかもしれませんが、ステークホルダー・マネジメントや、普段の生活や地域活動での人間関係などについても気軽に話せるような雰囲気で研究会を進めています。

ステークホルダー・マネジメント、もしくは本研究会に興味がある方がいらっしゃいましたら、お気軽に下記のホームページから連絡をお願いいたします。

● PMI日本支部ステークホルダー研究会 紹介ホームページ

https://www.pmi-japan.org/session/study_club/stakeholder.php



■部会紹介シリーズ

【部会紹介シリーズ】 その7

■ 組織的プロジェクトマネジメント研究会

組織的プロジェクトマネジメント研究会 副代表 池田 修一

1. 研究会の生い立ち

当研究会は、2001年ごろに組織におけるプロジェクトマネジメントの成熟度向上を目的として、「組織成熟度研究会」という名前で立ち上がりました。当時成熟度モデルがブームになっており、CMMI (Capability Maturity Model Integration) などが日本でももてはやされていました。このような背景の中でPMIからプロジェクトマネジメントの組織成熟度モデルであるOPM3[®] (Organizational Project Management Maturity Model) が発行され、日本においても検討の必要ありということで研究会が立ち上がりました。特に「成熟度」という観点から、CMMI 専門家の方の参加が多く、研究会を引っ張っていただきました。その時の登録メンバーは30名近くいました。

当時のビジョンは以下になります

- PM組織成熟度向上に関して日本における主導的役割を担う研究会
- PMI本部と連携してOPM3[®]標準の更なる発展に貢献する研究会

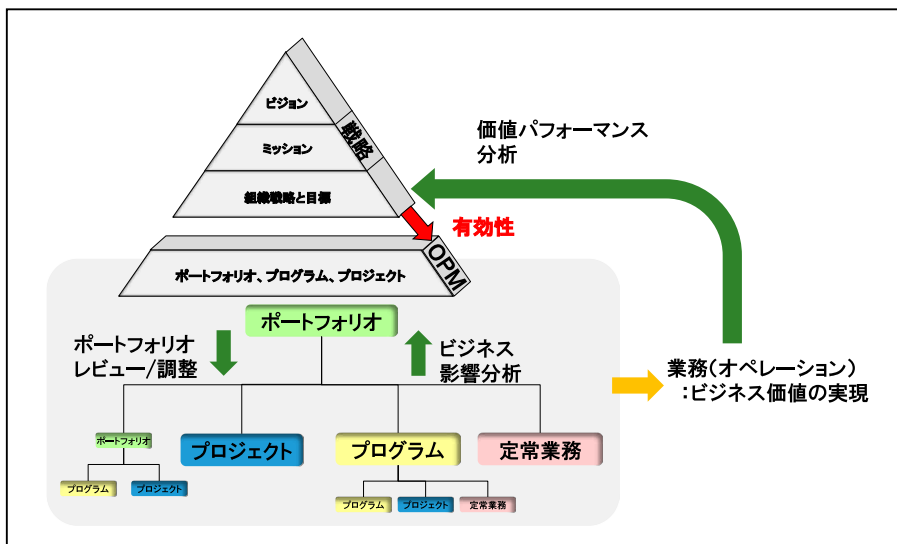
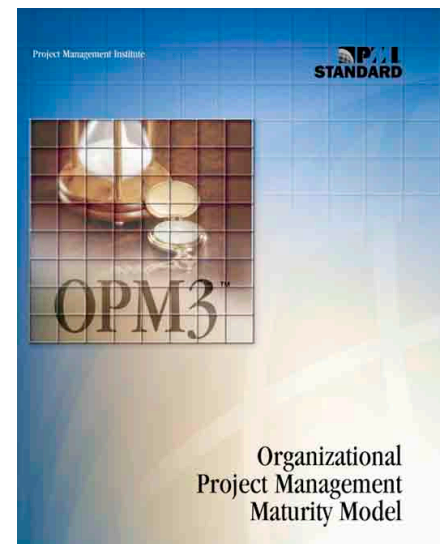
- PM組織成熟度向上知識センター、教育・普及センターとして機能

2. OPM、OPM3[®]とは何か？

組織的プロジェクトマネジメントとは、戦略実行のフレームワークであり、組織で実現可能な実務慣行と共にポートフォリオ、プログラム、およびプロジェクトマネジメントを活用して、より優れたパフォーマンス、より良い結果、および持続可能な競争優位性をもたらす組織戦略を首尾一貫して想定通りに実現しようとすることを目指します(図1)。

OPM3[®]は2003年に第1版(図2)が発刊されました。OPM3[®]は、OPMを達成するためのガイドラインであり、明確に結び付いたポートフォリオ、プログラム、プロジェクトを通して、戦略を達成する方法を提供します。また、ポートフォリオ、プログラム、プロジェクトのコンピテンシーを開発することによって、人的資本の効果的な利用を強化することができます。この際に組織のプロジェクトマネジメントの成熟度を、アセスメント・ツールを使って測定することがで

図1

図2 OPM3[®] 第1版

Best Practice and Competence / PM 事例・知識

■部会紹介シリーズ

きます。第1版ではツールがCD-ROM(図3)として提供されていました。このツールでは、成熟度を特定するだけでなく、改善エリアを選択し、より詳細なアセスメントを行い、改善計画を立てることができます。これを組織が改善のサイクルとしてまわしていきます(図4)。

現在ではプログラムマネジメント、ポートフォリオマネジメントのそれぞれの第4版がリリースされていますが、これらの標準の第1版がリリースされる前に、OPM3®では既に

この2つのマネジメントが定義されていたので、当時は新しいマネジメント手法であり、新鮮に感じました。

2008年にはOPM3®の第2版が発刊されました(図5)。第2版では基本的な考え方は一緒ですが、アセスメント・ツールがWebでのオンライン版(図6)になり、成熟度もグラフィカルな表示ができるようになりました。また、OPM3®はその当時のPMBOK®、プログラムマネジメント標準、ポートフォリオマネジメント標準の版と整合を取っており、それに合せ

図3 アセスメントツール (CD-ROM版)

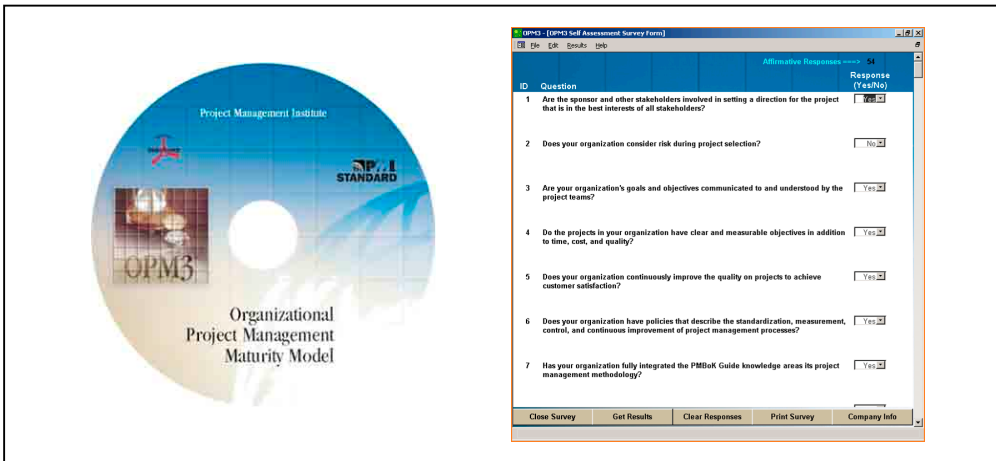


図5



図4 OPM3サイクル

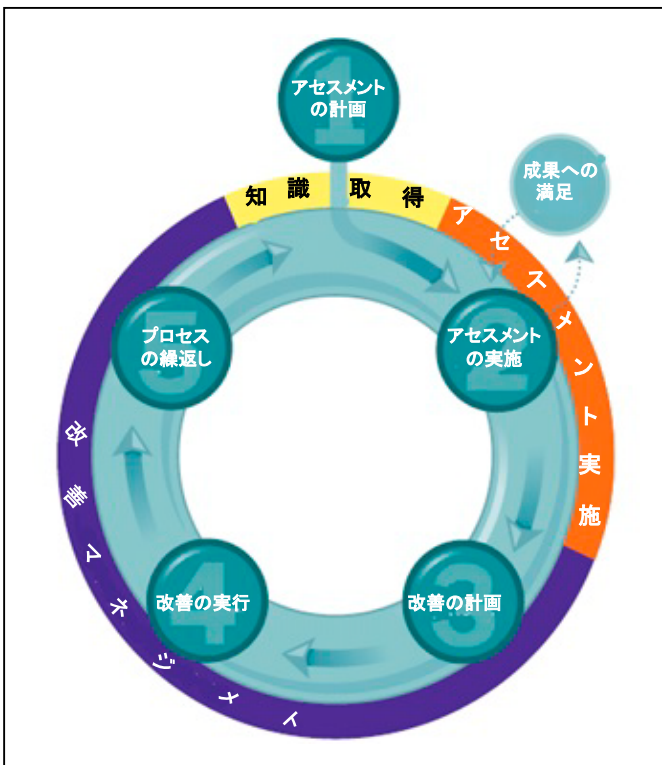
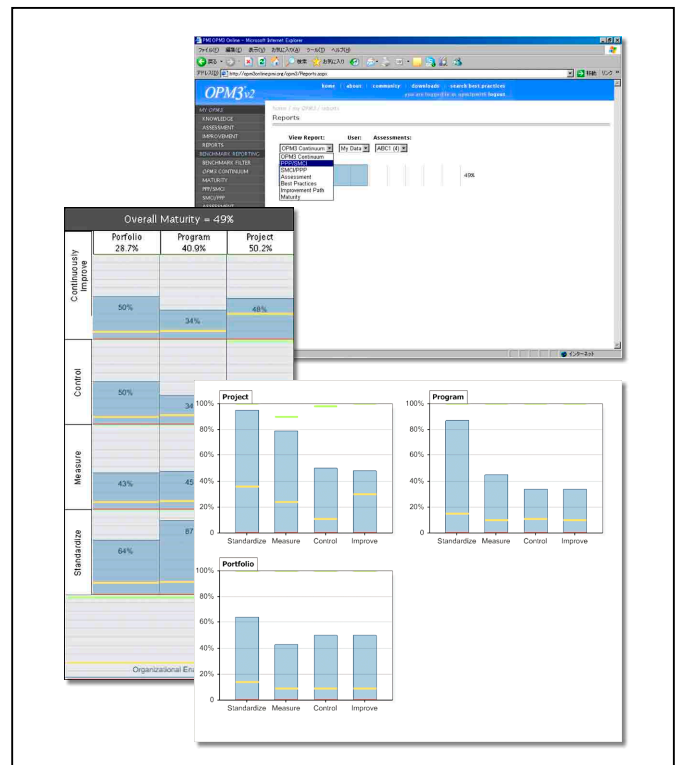


図6 アセスメントツール (オンライン版)



Best Practice and Competence / PM 事例・知識

■部会紹介シリーズ

てアセスメントの際に利用するベストプラクティスも洗練されています。

OPM3®では、OPM3®が持っているベストプラクティスと組織のプラクティスを比較し、成熟度を測ります(図7)。このベストプラクティスは以下の2種類があります。

1. プロセス・ベストプラクティス

プロジェクトマネジメントに関するプロセス(例えばスコープ定義、リスク特定など)の47個、プログラムマネジメントに関するプロセス(例えばプログラム調達計画、プログラム・コスト予算化など)の36個、ポートフォリオマネジメントに関するプロセス(例えばポートフォリオ・ロードマップ、ポートフォリオ最適化)の16個に関するベストプラクティス。

2. 組織イネーブラ・ベストプラクティス

ポートフォリオ、プログラムそしてプロジェクトにおけるベストプラクティスの実装を支援し、持続するために強化される構造的、文化的、技術的および人的資源の活動で、組織のプロジェクトマネジメントを支援するために組織内で作られるはずである一般的なマネジメントプロセスに関

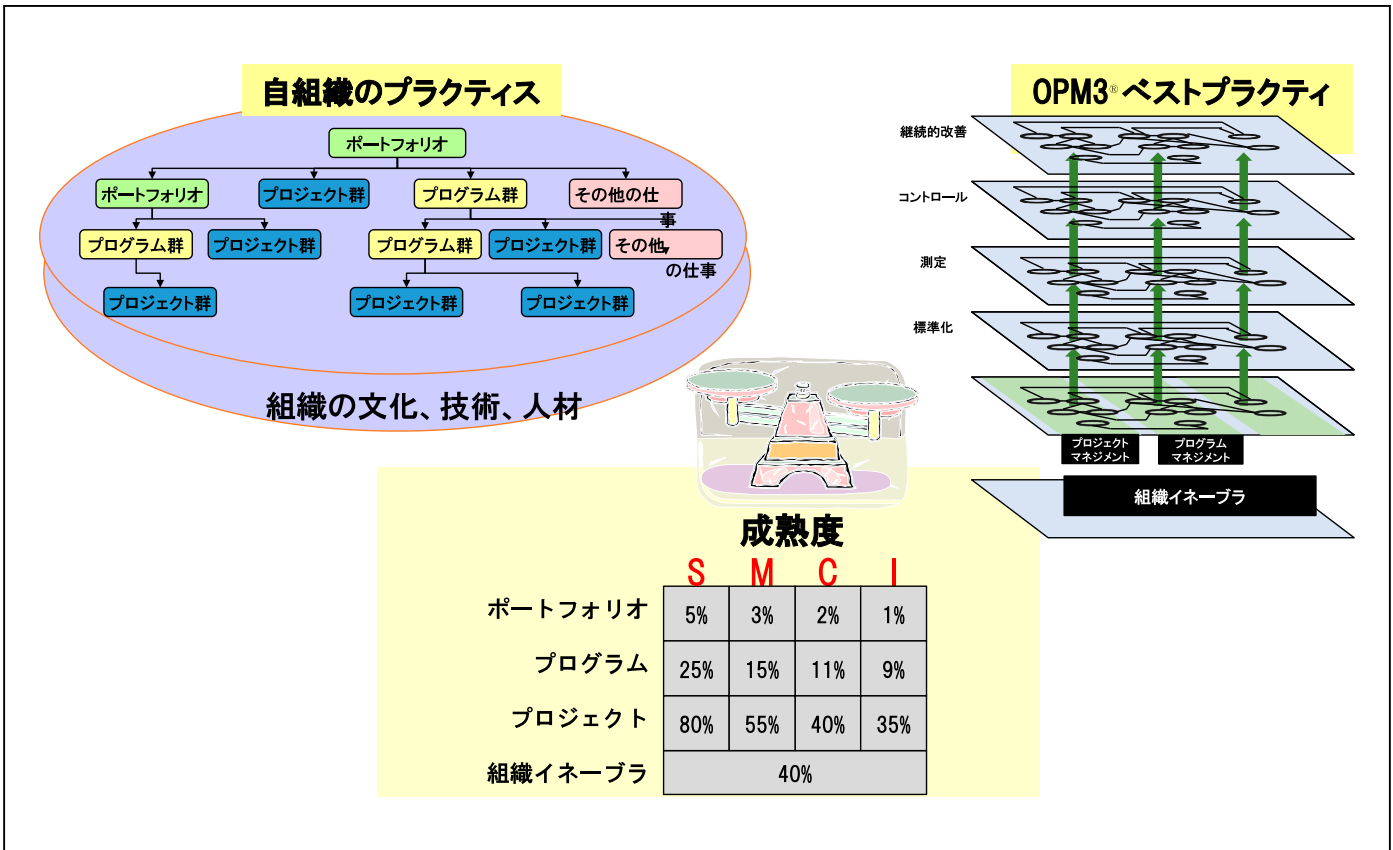
するベストプラクティス。

どちらも必要なベストプラクティスですが、研究会では特に「組織イネーブラ」について深く議論をしてきました。

アセスメントでは、「スコープ・マネジメント計画プロセスの標準化をしていますか?」、「強力なスポンサーシップを確立していますか?」、「上級管理者を教育していますか?」などの質問を組織に行い、その実現結果から組織の成熟度を測ります。プロセス・ベストプラクティスでは、Standard (標準化)、Measure (測定)、Control (コントロール)、Improvement (改善)の段階に分かれており、それぞれのプロセスがどれくらいの段階なのかを評価していきます。また、組織イネーブラ・ベストプラクティスについてはプロジェクトを導入するための組織の風土や文化、スキルなどを評価します。

2013年にリリースされた第3版(図8)では、さらに内容が充実され、アセスメントから改善方までの手順や方法が明確になりました(表1)。この標準では、OPMや組織をまず理解し、アセスメントの対象をスコーピングして、アセ

図7



■部会紹介シリーズ

図8

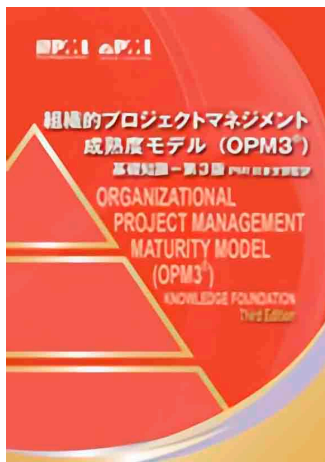


表1

| 専門領域 | サイクル要素 | 知識習得 | アセスメント実施 | 改善マネジメント |
|---------------------|--------|----------|----------|----------|
| ガバナンス・リスク・コンプライアンス | | OPM理解 | 計画立案 | 結果測定 |
| デリバリーとベネフィット・マネジメント | 組織理解 | アセスメント実行 | スコープ定義 | 提言作成 |
| | | | 改善施策実施 | |
| 組織の変革 | | 変革受容性評価 | 変革立上げ | 変革マネジメント |

メントを実施し、変革のための改善施策を提案、実施するといった進め方を紹介しています。また、プロセスごとにPMBOK®と同様にインプット、ツールと技法、アウトプットが定義されています。

研究会では実際にOPM3®を実施した組織などの結果や実施上の課題を含めてレビューしてきましたが、さらに実用事例などを集めて、都度次の版への要求事項としてPMIにインプットしていきたいと思えます。

3. これからの研究会の取り組み

研究会としては約17年間活動していますが、現在のビジョン/ミッションは以下の通りです。(図9)

ビジョン：組織的プロジェクトマネジメント (OPM) フレームワークの日本国内での普及展開を図るとともに、参加メンバーが楽しみながら知識を身につけ、交流を深めることを目

図9



的とする。

ミッション：組織的プロジェクトマネジメント (OPM) に関するフレームワーク、および日本国内のOPM事例を研究し、知識展開を行うことで日本のOPM適用および改善に貢献する

過去3年ほどの活動および成果は、以下のとおりです。

- OPM3® 第3版日本語版翻訳
- Implementing Organizational Project Management: A Practice Guideに関する研究
- Governance of Portfolios, Programs, and Projects: A Practice Guideに関する研究
- AXELOSのベストプラクティスに関する研究
- Benefit Realization Managementに関する研究
- プロジェクト・テラリングに関する研究

これらについては、PMI日本支部フォーラムにて成果を発表しました。

研究会では、OPM3®についての研究はもちろん、ここ数年はさまざまな取り組みをしており、

① OPMの研究

研究会の原点であるOPM、つまり組織にどのようにプロジェクトマネジメント、プログラムマネジメント、ポートフォリオマネジメントを導入して、定着させるかという研究をあらためて行っています。PMIからもPMBOK第6版、プログラムマネジメント標準第4版、ポートフォリオマネジメント第4版に続く標準として「OPM第1版」がリリースされる予定です。OPM3®はOPMの成熟度モデルですが、

Best Practice and Competence / PM 事例・知識

■部会紹介シリーズ

OPMとして単独でリリースされるのは初めてです。すでに Exposure Draftは出ており、研究会でもレビュー行いました。今後、この標準がリリースされた際に内容の理解を深めるための勉強会をして、PMI日本支部内でのセミナーなどの展開していく予定です。また、日本国内に留まらず、海外の OPMコミュニティとの交流や情報収集を行うことも考えております。いずれにせよ、どのような標準がでてくるか楽しみです。

②研究会独自のモデル

OPMよりもさらに領域を拡げ、プロジェクトマネジメントだけではなく、「いかに組織を成功に導いていくか」について、研究会独自のモデルを立案し、その考え方やフレームワークについて研究しています(図10)。変化する外部・内部環境に対応した戦略を立案し、迅速に実施していくことが、組織の成功につながると私たちは考えています。組織はこのために、内部のケイパビリティ(機能、組織、人、プロセス)を改善するための変革が必要になります。そして変革する際に、参考になるモデルがあると変革もスムーズに実行できます。そこで研究会では、この参考となるモデルを「リファレンスモデル」として、PMIの標準を含む、世の中にある様々

な標準やベストプラクティスを集め、これらのモデルを組織の状況に合わせてテーラリングしていくことが必要であると考えています。よって、各自がこのリファレンスモデルを学習し、研究会内で展開し、できれば企業等に導入の紹介をしていきたいと思っています。

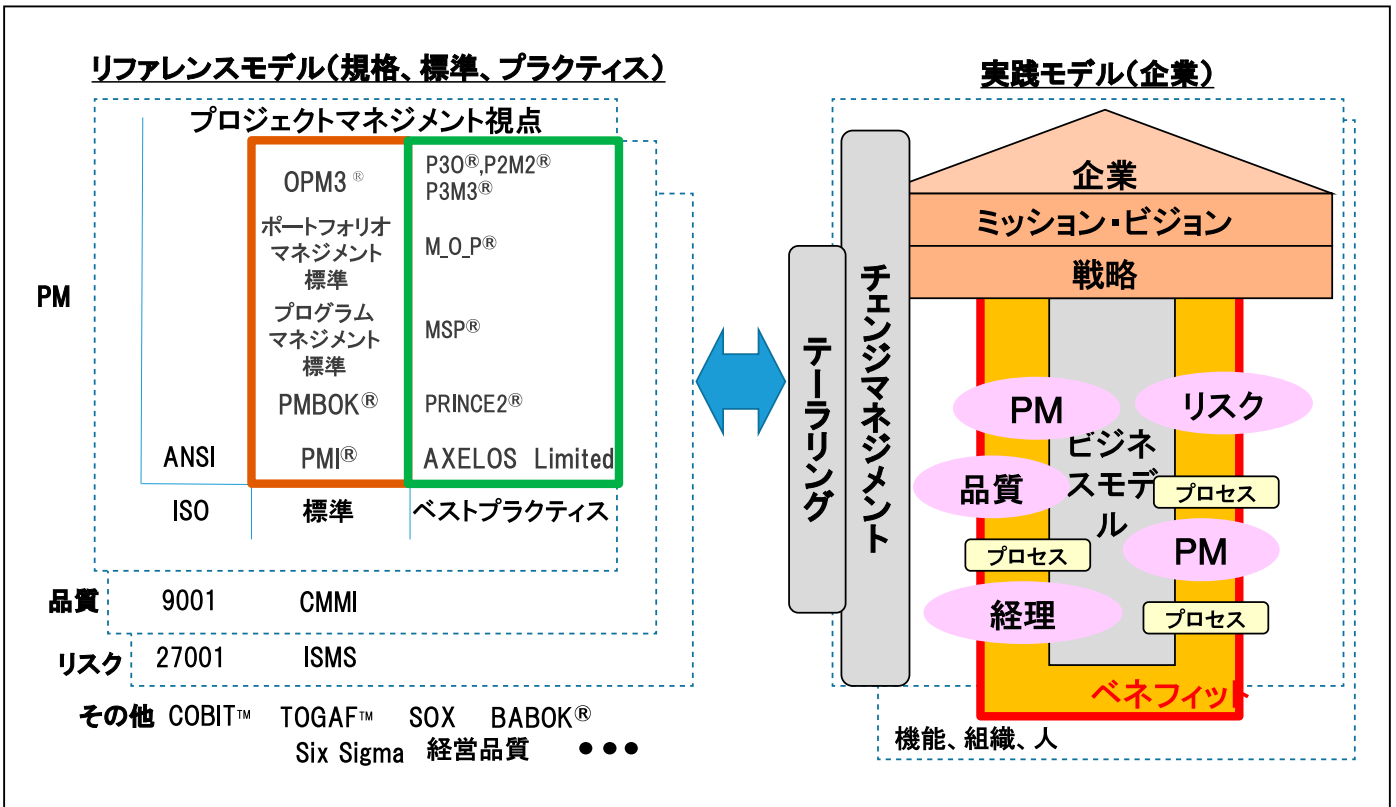
③他研究部会や団体との交流

OPMはPMIの各標準と密接に関係しているために、他研究部会や他団体とのコミュニケーションが欠かせませんので、相互に研究内容を展開していく予定です。

研究会在籍者は現在16名ほどで定例会は第4水曜日(19:00~21:00)に活動していますが、まじめに、かつ和気あいあいとした雰囲気、どなたでも溶け込んでいただけます。定例会終了後は近くのイタリアンレストランやそば屋で二次会にいそしんでいます。

組織にプロジェクトを定着させたい等の課題をお持ちの方やいろいろな標準を学びたい方は、いつでもお気軽にご参加ください。オブザーバー参加も大歓迎です。

図10



■部会紹介シリーズ

【部会紹介シリーズ】その8

■人材育成スタディ・グループ

人材育成スタディ・グループ リーダー 三好きよみ

■はじめに

人材育成スタディ・グループ（以下、人材育成SG）では、プロジェクト・マネジャーの育成をテーマとして、活動を行っています。参加メンバーが、実際の現場での思いや悩みを共有し、実践で役立つ成果物を作成することを目標としています。また、PMI日本フォーラムでは、2012年以降、毎年、成果発表を行っています。

「プロジェクト・マネジャー・コンピテンシー開発体系第2版(以下、PMCDF)」によると、プロジェクト・マネジャーには、知識や実践スキルとともに、人格コンピテンシーが必要とされています。人材育成SGでは、このプロジェクト・マネジャーに必要な3つのコンピテンシー、知識・実践・人格の中から、特に人格コンピテンシーに焦点をあてて活動してきました。そして、人格コンピテンシーは日本ではあまり馴染みがなくわかりにくいために、“人間力”と呼ぶことにしました。

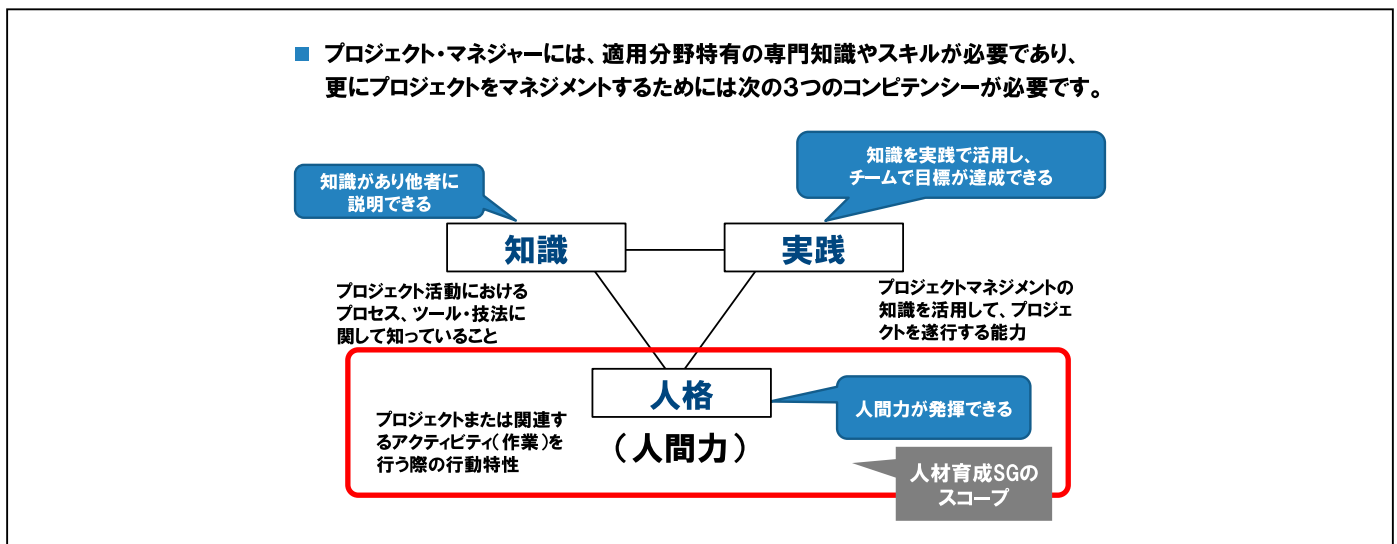
■これまでの活動のあゆみ

2013年に、『プロジェクト・マネジャー・コンピテンシー開発体系副読本(人格コンピテンシー)』を公開しました。これは、PMCDFの人格コンピテンシーをより詳細に解説したものです。2014年には、この副読本をブラッシュアップし、自身の強み・弱みを分析、可視化するための『人格コンピテンシー・チェックリスト』を付属して、公開しました。今年6月には、『人間力強化書「熱い思いでマネジメントせよ」』を公開しています。

■プロジェクト・マネジャーの人間力向上3部作

人材育成SGのこれまでの成果物を合わせて、「プロジェクト・マネジャーの人間力向上3部作」と呼んでいます。また、それぞれの成果物は、プロジェクト・マネジャーの人間力向上の3STEPに対応したものになっています。図3に示すように、STEP1では、『人格コンピテンシー・チェックリスト』を使用して人間力の査定を行う、STEP2では『プロジェクト・マネジャー・コンピテンシー開発体系副読本（人格コンピテ

図1 人材育成SG活動の焦点



Best Practice and Competence / PM 事例・知識

■部会紹介シリーズ

図2 人材育成SG活動のあゆみ

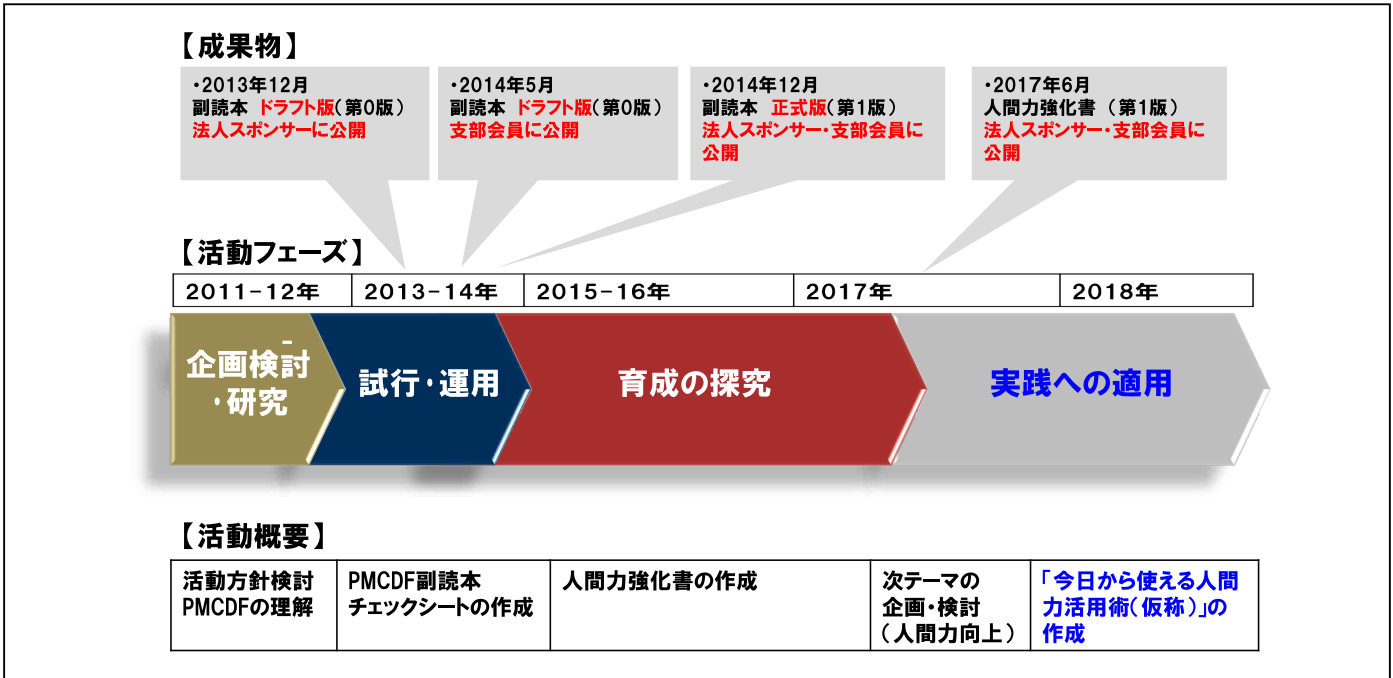
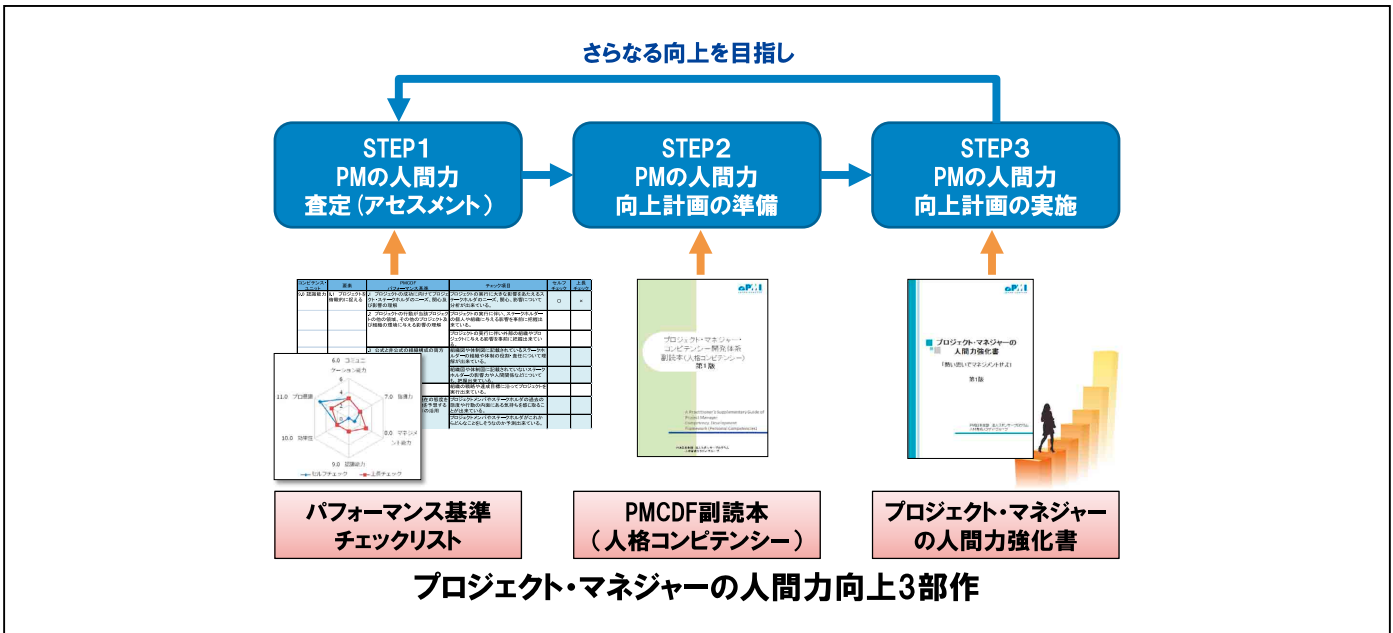


図3 プロジェクト・マネジャーの人間力向上3部作とステップとの関係



ンシー)』によって、どのような人間力が必要かを理解する、STEP3では『人間力強化書「熱い思いでマネジメントせよ』を参考に、人間力向上に実際に取り組む です。このサイクルを回すことで、より効果的にプロジェクト・マネジャーの人間力を向上させていくことができます。

■ **熱い思い(あ・つ・い・お・も・い・で) マネジメントせよ!**
最新の『プロジェクト・マネジャーの人間力強化書「熱い思いでマネジメントせよ』は、強化すべき人間力をコミュニケーション能力、指導力、マネジメント能力、認識能力、効果性、プロ意識、習慣化 にまとめ、「七つの要諦」としています。

■部会紹介シリーズ

図4 熱い思いでマネジメントせよ！

熱い思いで (あ・つ・い・お・も・い・で) マネジメントせよ！

- コミュニケーション能力
 - (あ) 相手の話を傾聴し、人を見て説け！
- 指導力
 - (つ) 強い意志と信念で、メンバーを動機付け、プロジェクトを牽引せよ！
- マネジメント能力
 - (い) いい(良い)チーム作りと共に、段取りと仕切りを考えてマネジメントせよ！
- 認識能力
 - (お) おおきな視野を持ち、問題の本質を捉えよ！
- 効果性
 - (も) もっとも適切な方法を選択せよ！
- プロ意識
 - (い) 一流なら、倫理的行動規範に従い、責務をまっとうせよ！
- 習慣化
 - (で) できる自分を想像し、何度も何度も繰り返し人間力を身に付けよ！！

この「七つの要諦」をテーマとして、主人公がプロジェクトのさまざまな問題に直面し悩みながらも、ひとりのプロジェクト・マネジャーとして成長していく物語が構成されています。望ましい行動を具体的に提示し、必要な行動特性のヒントを示唆し、自発的な“気づき”を促すというストーリーです。この物語を読んだ方が共感を得て、後輩の指導または、自分自身の成長に役立てていただければ幸いです。

また、タイトルにもある「熱い思いあ・つ・い・お・も・い・で」でマネジメントせよ！」と「七つの要諦」を対応させたメッセージを作りました。日頃の仕事の中でも、ふと立ち止まり、これら7つのメッセージを思い出していただければと思います。

『プロジェクト・マネジャーの人間力強化書「熱い思いでマネジメントせよ!』はこちらからダウンロード可能です。「七つの要諦」カードを付録としてつけています。ぜひご活用ください。

https://www.pmi-japan.org/news/info/2017_06_23_ningenryoku1.php

■活動状況

メンバーは、年齢、職種もさまざまですが、皆さん個性豊かで親しみのある方たちです。現在は、毎月第3金曜日18



定例会の様子



合宿の様子

■部会紹介シリーズ

時から2時間程度の定例会を開催し、その後は懇親会も開催しています。何でも言えるフランクな感じで、新しいメンバーの方もすぐに馴染んでいただけ、短期間で旧知の間柄のようになります。

また、毎年1回、一泊二日で合宿を開催しています。今年も10月に通算5回目の合宿を行いました。二日間集中しての活動では、日頃の定例会ではなかなかできない深い討議を行うことができます。さらに、寝食を共にすることで親睦も深まり、その後の活動はより活発になってきています。

■おわりに

見学だけでも大歓迎です。見学後にメンバーになられた方もいらっしゃいます。メンバーが果てなく考え、思いや悩みを共有する場であり続けることが、当SGの使命であると考えています。あなたもプロジェクト・マネジャーの人間力を一緒に考えてみませんか？

今後は、新しい活動テーマに沿って、活動を続けてまいります。この記事をご覧になって、関心をもたれた方は info@pmi-japan.org 宛てにその旨をお知らせください。大歓迎いたします。

Activities / 支部活動

■2017年度 地域セミナー 開催報告

PMI日本支部 企画、地域サービス担当理事 浦田 有佳里

PMI日本支部の戦略委員会のひとつである地域サービス委員会では、地域の会員の皆様へのサービス向上、地域のコミュニティ活性化のために活動しています。今年は、地域セミナーの企画および実行を担い、全国9ヶ所（計10回）でセミナーを開催しました。

- ① 9月23日(土・祝) 静岡市
- ② 10月 7日(土) 札幌市
- ③ 10月14日(土) 仙台市
- ④ 10月21日(土) 大阪市
- ⑤ 10月22日(日) 生駒市 (奈良県)
- ⑥ 11月 3日(金・祝) 金沢市
- ⑦ 11月18日(土) 広島市
- ⑧ 11月23日(木・祝) 名古屋市
- ⑨ 12月 2日(土) 福岡市
- ⑩ 12月16日(土) 大阪市〔追加開催〕

今年は、9都市10ヶ所で350人以上の方々が申込をしてくださいました。満席の会場もあり、追加開催も行いました。

セミナーの主テーマはPMI®でも重要なテーマとなっているアジャイルです。今回発売された『PMBOK®ガイド第6版』にも開発アプローチとしてアジャイル型（適応型）が記載されています。

今回のセミナーでの主テーマ講演はPMI日本支部アジャイル研究会の協力を得て実現することが出来ました。アジャイル研究会の渡会講師には地域サービス委員と共に全国を巡っていただきました。



アジャイル研究会
渡会氏

講演内容は、アジャイルプロジェクトに関するアンケート（有効回答数124）を元にまとめた結果、およびその考察が盛り込まれ、日本のアジャイルプロジェクトの現状が良くわ

かっていただけたと思います。

講演ではアジャイルの必要性やアジャイル研究会で実施しているPMI-ACPの勉強会の案内から始まり、実際のアジャイルプロジェクトの肝や渡会講師の実際の経験事例といった、誰もが知りたい内容が盛りだくさんでした。

アジャイルの原則およびプラクティスを理解し、プロジェクトに応用する基本的な能力を備えるための資格、PMI-ACP (PMI Agile Certified Practitioner®) についての詳細な説明もあり、参加された方々は興味津々の様子でした。PMI-ACP資格取得者のPMP®資格取得者に対する割合は、残念ながら世界各国の中でも最下位となっています。PMI-ACPの資格にも興味を持っていただき、新たなPM像をめざし、プロジェクト・マネジャーのスキルの変化に、今後、日本のPMP®も追随していくことを望みます。

もうひとつのテーマとしてプロジェクト・マネジャーの人材育成について、講演を行いました。講演は、PMI日本支部の地域サービス委員が担当し、情報提供ができたと考えています。PMI®では新たなPM像としてタレント・トライアングルを提示し、今までのプロジェクト・マネジャーのレベルをさらに引き上げ、企業に価値をもたらすことが出来る人材としてスキルアップしていく必要があると打ち出しています。複雑なプロジェクトから組織の改革まで必要なマネジメントはBRM (Benefits Realization Management) で、これは戦略からプログラム・プロジェクト実行、業務オペレーションまですべてのプロセスで必要になってきます。このように企業の成功に向け、人材に求めるものが変わってきました。プロジェクト・マネジャーもこれまでのテクニックとしてのプロジェクトマネジメントの能力だけでなく、企業戦略やビジネスマネジメントの鋭い感覚や、高いリーダーシップ能力がますます求められてきます。

PMI日本支部では、人材育成に関する研究会がいくつも活動しています。タレントコンピテンシー研究会、法人スポン

Activities / 支部活動

■ 2017年度 地域セミナー 開催報告

地域サービス委員会
井奈波氏地域サービス委員会
北畑氏地域サービス委員会
中西氏地域サービス委員会
成松氏地域サービス委員会
杉村氏

サー様による人材育成スタディ・グループ、PM教育研究会の3つです。

タレントコンピテンシー研究会は、ショートケースによるワークショップなどPMCDFを利用した人材育成の手法を研究しています。また、PMCDFの翻訳も行っています。

法人スポンサー様による人材育成スタディ・グループでは、プロジェクト・マネジャーの人格（人間力）に焦点をあてて研究を進めています。プロジェクト・マネジャーに必要な行動を『“あ・つ・い・お・も・い・で”マネジメントせよ！』を掲げ、人間力のアセスメント、計画、実行のプロセスで有効なアウトプットを会員に提供しています。

PM教育研究会では、プロジェクトマネジメントに関する知識や素養は今後、社会に求められる人材のジェネリックスキルであることを広く発信し、大学などの教育機関でのPM講座を実施することによりPM教育の普及を推進しています。

セミナーの最後では、地域会員の方々へのサービス向上、地域コミュニティの立ち上げや活性化をミッションとする地域サービス委員会の紹介を行いました。各地域に地域サービス委員会の活動を知っていただき、共に活動していただける仲間を募っています。

現在、PMI日本支部では、関西ランチと中部ランチという二つのランチが組織化されています。ランチでは、それぞれ運営組織のボランティアがおり、ランチの研究会として活動をしているメンバーもいます。また、ランチが無い地域でもPMI日本支部会員を中心としたコミュニティがあり、地域の企業や行政、アカデミックと連携し充実した活動となってきています。

これからも地域サービス委員会では、日本の各地域にてプロジェクト・マネジャー、PMP®の方々がコミュニティを作り、企業や学校、行政との関わりを持ちながら、活発な活動ができることを期待し、支援していきたいと考えています。



■「PMI日本支部リーダーシップミーティングLM2017」概要報告

LM2017運営チーム・リーダー 伊熊 昭等

監修：PMコミュニティ活性化委員会 委員長 当麻 哲哉

2017年9月2日(土)と3日(日)の2日間、東京都調布市にあるNTT中央研修センターにて、「PMI日本支部リーダーシップミーティングLM2017」が開催されましたので報告します。

■リーダーシップミーティング (LM) とは

今年で3回目になるこの会議は、戦略委員会のひとつ、PMコミュニティ活性化委員会(委員長 当麻哲哉理事)が中心となって企画しています。PMI日本支部の各部会(委員会、研究会、ブランチ、プログラム)から、リーダーやアクティブメンバーを2名ずつ派遣いただき、今後のPMI本部や日本支部のビジョンや方向性、施策などを共有したり、参加者のリーダーシップ育成を目指したワークショップを行ったりすることで、よりアクティブな部会活動を促し、PMコミュニティを活性化させるのが目的です。

PMI本部で行われているLIM (Leadership Institute Meeting) を参考にしていますが、日本のPMコミュニティの特徴を生かした独特の設計をしています。というのも、PMI日本支部は、他国の通常のチャプターとは異なり、3,500名以上の会員を有するカントリー・チャプターであり、さまざまな分野の部会活動が日々活発に行われています。しかし、大きな組織であるがゆえに、大量の情報を共有して方向性を合わせていくのは容易ではありません。そこで本部のLIMのような興味分野で小分けにしたパラレルセッションは行わずに、全員が同じテーマで情報共有し、お互いに理解しあってレベルアップするように、企画しています。

過去を振り返ってみると、初回のLM2015は、アイデア創出の思考能力を鍛えるテーマで、システム×デザイン思考のワークショップを実施、第2回のLM2016は、部会運営の悩みを共有し合って解決策を考える問題解決手法のワークショップを行っています。今年のLM2017はその続編にあたり、組織が進むべき方向をしっかりと定めるためのロジックモデルを学ぶワークショップを実施いたしました。

LM2017の開催にあたり、LM2015、LM2016の運営経

験者である伊熊昭等(リーダー)、吉田謙一氏、十返文子氏、滝沢昇氏に加えて、新たなメンバーとして河々谷健一氏と杉原卓朗氏の計6名から構成する「LM2017運営チーム」を結成して企画・準備・運営を行いました。

6月のキックオフミーティング後、各部会へ「グループワークのテーマ募集」を実施し、ソーシャルPM研究会から提案された「部会活動活性化のために～デザイン思考からBRMへ～」が採用されました。このテーマは、ソーシャルPM研究会で活動中の内容でしたが、2日間のLM2017ワークショップに適したものとするために、同研究会の高橋正憲理事、藤井新吾氏、佐分利淳雄氏をLM2017運営チームに加えて議論に議論を重ね、オリジナルのワークショップをわずか数か月で作上げることができました。その過程では、LM2017運営チームメンバーが実際に4回のプレ・ワークショップを行って内容をブラッシュアップしています。当日は、講師とサポート要員をソーシャルPM研究会から出していただき、滞りなくワークショップを実施できました。

■初日の情報共有とワークショップ

開催目的に沿って、各部会から2名の参加をお願いしましたが、最終的には、部会メンバー48人(内、運営チーム8名)、会長・理事・監事13名、PMIアジア・パシフィック1人、事務局3名の65名が参加し、2日間にわたって熱い議論が展開されました。部会同士の交流が深まることを意図して、例年同様、原則として全員宿泊することを条件に参加していただきました。

初日、奥澤薫会長の挨拶で開幕し、PMIアジア・パシフィックからのゲスト、Ms Chevon Low氏より、PMI本部の今後の活動方向について「PMI Global Updates」と題してわかりやすい英語のスピーチが、それに続き神庭弘年監事より「BRM (Benefits Realization Management) についての解説」と、端山毅副会長より「PPPM (Project, Program, and Portfolio Management) 普及展開に向けた課題と対策」のスピーチ

■「PMI日本支部リーダーシップミーティングLM2017」概要報告

があり、グループワークで議論するための重要な事前情報が提供されました。



リーダーの人材育成を兼ねたワークショップ「部会活動活性化のために～デザイン思考からBRMへ～」は、プロジェクトマネジメントの究極の目標はベネフィットの実現であるという考え方を、イノベティブでポジティブな議論を通して整理して可視化することを目指しました。参加メンバーを6つのグループに分けて行いましたが、その組み合わせや世話役の選定は、運営チームで事前に参加者のバックグラウンドを調査し、参加者の出身部会の散らばり、男女構成のバランスなど、多様性を持たせつつ効果的なグループ構成となるように工夫しています。



限られた時間の中でワークショップをスムーズに行うため、ソーシャルPM研究会の方々には、いろいろ趣向を凝らしていただきました。冒頭の導入の講義では、昨年度のLM2016ワークショップ「システム×デザイン思考による部会活動のお悩みワークショップ」の討議結果を振り返り、部会活動活性化のための「やりがいのある部会」を考える手法を学びました。その後、ゴールイメージ（ビジョン・ステートメント）の策定、ビジョンから長期／中期アウトカムへの展開、活動内容のリストアップ、活動内容からアウトプット、短期／中期アウトカムへの連鎖、ベネフィットリストの作成、ステークホルダー毎のKPI設定という順にグループワークを行い、1日目のまとめとして各チーム



の部会運営ロジックモデルの共有を行いました。

■夕食・交流会と2日目の準備

夕食前に浦田有佳里理事より「PMI日本支部20周年記念事業」について活動計画の紹介が、武上弥尋理事からは「20周年/30周年/100周年 Outcome」に



ついてのアイデア募集があり、休み時間や夕食時間に参加者全員でいろいろなアイデアを出しました。特に、30周年/100周年後のアウトカムには、ユニークな内容も多く楽しく議論ができました。

夕食・交流会は、今年もケータリング方式で研修センターの食堂に集まって行われました。夕食の時間を利用して、2日目のワークショップに向けた6つの討議課題を運営チームが提示し、参加者各自が取り組みたい希望テーマを投票してもらいました。そのテーマとは、

- A：グローバル視点で日本からの発信を英語で考える
- B：PMI日本支部としてPPPM普及・推進の取り組みを考える
- C：社会価値創出への取り組みを考える
- D：部会活動を活発にする取り組みを考える
- E：部会メンバーを増やす取り組みを考える
- F：部会活動の情報発信の取り組みを考える

の6つです。投票結果をもとに、参加者数に偏りが出ないように運営チームで人数調整を行いました。その後は希望者で懇親会が開かれ、参加者の有志が持参した飲食物を肴に深夜まで活発なネットワーキングが行われていました。部会間の交流促進を目的に宿泊形態をとっているLMの思惑通りになったと考えています。

■2日目のグループ討議と成果発表

ワークショップ2日目は、朝から活発な討議を行いました。6グループ別に1日目に学んだ手法をもとに活動によるアウトカム連鎖のストーリーを描き、1年後の短期アウトカムから、日本フォーラムのテーマ候補を考えるまでを、各グループでは限られた時間を有効に使って成果物作成を行っていました。

2日間の締めくくりは、各グループのプレゼンテーションと質疑応答です。プレゼンテーションでは、成果物の説明だけでなく、その内容を効果的に表現するため、即興による「寸

■「PMI日本支部リーダーシップミーティングLM2017」概要報告

劇（スキット）」（5分間）を演じてもらいました。昼休みの時間を「寸劇」の練習に使うってプレゼンテーションに臨む熱心なグループもあり、即興とは思えないほど各グループの演技は熱が入って良く練られた内容で、踊りを取り入れたグループもあり会場は、大爆笑の連続でした。



昨年からはじめた寸劇によるプレゼンテーションは、LMの恒例行事のようになっており、たいへんな盛り上がりを見せました。

発表後の質疑応答でも活発な議論が行われ、ストーリー性も含め最も優れたプレゼンテーションを行ったグループC「社会価値創出への取り組みを考える」に、最優秀賞が贈られました。

端山副会長の全体講評で解散式を終え、イベントは盛況裡に終了しました。

LM2017での議論が来年度の各部会の活動計画に反映され、支部の中期計画遂行のための材料になることが期待されます。なお、参加者へPMP資格維持のPDUとして Technical:2.00、Leadership:2.00、Strategic/Business:2.00 のトータル6.00PDUが付与されています。

■ LMの効果

3年連続で開催したLMの効果について、組織の活性化の観点と、個人のスキル向上の観点の2点に大別してまとめます。

1. 情報共有によるPMコミュニティの活性化

PMI本部や日本支部の活動の方向性がオープンになり、

会長・理事・部会アクティブメンバーが一緒になってコミュニケーションする場を持つことで、アクティブメンバーにとってのボランティア活動の価値がより深く理解され、モチベーションの向上につながり、日本支部での活動が活発化される効果が期待されます。

2. 個人のリーダーシップスキル向上

LMでのリーダーシップ育成ワークショップへの参加により、部会の中でのリーダーシップ発揮に役立つだけでなく、各自の実務におけるプロジェクトマネジメント実践にも役立つスキルを習得できます。特にこの3年間のLMにおいては、アイデア創出の思考能力開発、問題解決手法の習得、ビジョンと活動をつなぐロジックの構築とベネフィットのKPI設定などを学びました。また学んだことを部会活動に適用できるように、希望する部会にはフォローアップをするようにしています。

■ 最後に

日本支部として3回目となるLM2017は、これまでの経験も生かされ、運営チームと事務局が連携したチームワークも良く、想定外の事態にも臨機応変の素早い対応ができ、2日間を成功裡に終了することができました。ご参加いただいた部会アクティブメンバーの方々からも、満足度の高いアンケート結果をいただいています。

冒頭で述べたように、他のチャプターでは例を見ない日本支部独特のLMを開催することにより、日本支部のPMコミュニティをより一層活性化させることができ、毎年恒例のイベントとして定着化させることができました。アンケート結果をもとに、次年度に向けてさらなる改善を検討していきたいと思えます。

参加された皆様および、ご協力くださったボランティアメンバーやスタッフの皆様に、この場を借りて心からの感謝を申し上げます。



■ PMI日本支部中部ブランチ設立2周年記念特別セミナー開催報告

PMI日本支部 中部ブランチ運営委員 宮崎 真弘



中部ブランチは2015年11月14日にPMI日本支部の中部地域におけるコミュニティとして、地域の発展と幸せにつながるプロジェクトマネジメントを見つけようというビジョンの下、発足しました。

設立2周年に当たり、中部地域において、社会問題に積極的かつ先進的に取り組んでいる自治体や大学に講演を依頼しセミナー開催を企画しました。セミナーでは地域社会の充実化・活性化につなげるとともに、PM有効性を発展させるきっかけになるような講演をしていただきました。活動内容、プロジェクトを進める中での苦労話、どう乗り越えようとしているかを具体的に紹介いただきました。

以下、中部ブランチ設立2周年記念特別セミナーの様子をご紹介します。

■ 開催概要

【主催】 PMI日本支部

【日時】 2017年10月28日（土曜日）

【場所】 名古屋大学医学部附属病院 基礎研究棟 4階 第4講義室

【テーマ】 「PMI日本支部中部ブランチ設立2周年記念特別セミナー」

～未来に向けて社会の在り方を一緒に考えて行動しよう～

【アジェンダ】

■ 開会宣言

■ 主催者挨拶

端山 毅 氏

PMI日本支部副会長

■ 来賓挨拶

白鳥 義宗 氏

名古屋大学医学部附属病院 病院長 補佐

メディカルITセンター長・病院教授 医学博士

■ 講演#1 テーマ：環境先進都市を目指す豊田市の取り組み

柴田 徹哉 氏

豊田市 企画政策部 未来都市推進課 課長

■ 講演#2 テーマ：地域医療計画等の策定作業の裏側事情から見えること

小林 利彦 氏

浜松医科大学医学部附属病院 医療福祉支援センター長 特任教授

■ 閉会宣言

セミナー会場は、来賓ご挨拶を担当いただいた白鳥先生が勤めていらっしゃる名古屋大学医学部附属病院 基礎研究棟 4階 第4講義室を使用させていただきました。ここは階段型の教室となっており、講演者を包み込むようなアカデミック

■PMI日本支部中部ブランチ設立2周年記念特別セミナー開催報告

な雰囲気を楽しむことができました。

セミナーはPMI日本支部副会長端山 毅からの主催者挨拶から始まりました。端山副会長からは、関西に続く大きな支部として、中部ブランチの今後へ期待するコメントを頂戴しました。



端山 毅 PMI日本支部副会長

続いて、来賓挨拶として名古屋大学 医学部付属病院 メディカルITセンター長白鳥義宗氏より、情報+医療+工学を連携させ産業界への貢献をしていくこととCIO (Chief Innovation Officer) に今後なっていくことが重要であるとのことご祝辞をいただきました。



白鳥 義宗氏

記念講演の最初に登壇いただいたのは、豊田市 企画政策部 未来都市推進課 課長 柴田 徹哉 氏。講演テーマは「環境先進都市を目指す豊田市の取組み」でした。



柴田 徹哉 氏

環境モデル都市として、二酸化炭素削減など目標を掲げて新しい取り組みを特別規制緩和の元に複数のプロジェクトを進めているプログラムマネジメントの事例をご紹介いただきました。その中で市役所ならではの悩みとして、環境都市としてのプロジェクト(実証実験)が市民の利益にどうつながっているのか？に対する説明責任を求められる部分が特徴的でした。

- 上記の活動がどのように市民の暮らしに直結するのか？
- 他の都市に比べて図書館が多い、美術館がある、競技場がある。それら公共施設が充実している。
- それは豊田市に活発な産業がたくさんあることによる経済基盤が理由となる。だとすれば、今後も産業が盛んで雇用がある町にしていく必要がある。
- そのために豊田市でビジネスする魅力が必要、そのためにビジネスをしやすい環境がないといけない。

上記のように仕事とその目的を繋げることが重要であるとおっしゃっていたのもまさにプログラムマネジメントであり、一例を学べるよい講演となりました。



柴田氏と中部ブランチ代表 木南

Activities / 支部活動

■PMI日本支部中部ブランチ設立2周年記念特別セミナー開催報告

続いて、登壇いただいたのは浜松医科大学医学部附属病院医療福祉支援センター長 特任教授 小林 利彦 氏。講演テーマは「地域医療計画等の策定作業の裏側事情から見えること」でした。



小林利彦氏

霞が関が各地域の特色を理解して施策を展開することは難しい中で、霞が関が展開する医療施策の大方針に対して、それぞれの地域がその地域の特性に合う形でテーラリングできていない、日本全体の組織の問題をお話していただきました。特に公共においてはステークホルダーがそれぞれの地域毎に異なるため、それぞれのステークホルダーを特定して調整していくプロセスにおいてPMOの介入価値をあらためて認識するとともに、この取り組み全体がプログラムマネジメント、プロジェクトマネジメントが活かせるものだと感じました。



小林氏と中部ブランチ代表 木南

以上、官・学のリーダーの方から行政と市民との関係をきちんと説明することの重要性や医療現場のリアルな声についてご講演をいただきました。講演者の方々の熱い思いが伝わる非常に有意義な時間となりました。

セミナー当日は、雨（台風予想もあった中）が降るあまりよくないコンディションの中、60名を越える方々の参加を得ました。セミナーへの参加者をはじめ、今回の活動を通じて、多くの方々に中部ブランチの活動を告知・披露することができました。これからも中部ブランチの活動にご期待ください。

セミナーの後は交流会を開催し、講演者の方々・PMI日本支部関係者・一般参加者に参加いただきました。一般参加者の中には学生さんも参加されていて、現場の苦勞を直接聞く機会が持てたことが非常に有意義だったとのコメントをもらうことができました。

最後に、PMI日本支部中部ブランチ設立2周年記念特別セミナーに参加いただいた皆様、ボランティアでセミナー運営に携わっていただいたスタッフの皆様にご心より感謝いたします。



中部ブランチ設立2周年記念特別セミナー 運営スタッフ

PM Calendar / PM カレンダー

PMI日本支部のイベントならびにPM教育関連セミナーなどの案内です。
詳しくは、PMI日本支部のWebサイトをご参照ください。

【ホームページにて公開中】

■ PMI日本支部関連セミナー

● 1月度月例セミナー

サントリーのDNA “やってみなはれ”

～ なぜ生き残ったか ～

- 日時：2018年1月19日(金) 19:00～21:00
- 場所：アクセス渋谷フォーラム
- 2PDU、ITC実践力ポイント2時間分

● 2月度月例セミナー

創業してから15年間で学んだ大切なこと

～ 失敗しても修羅場を経験しても、事業を成功へ導くことが出来た大きな要因とは ～

- 日時：2018年2月16日(金) 19:00～21:00
- 場所：アクセス渋谷フォーラム
- 2PDU、ITC実践力ポイント2時間分

● アジャイルプロジェクトマネジメント基礎～

- 日時：2月1日(木) 9:30～18:00
- 場所：PMI日本支部セミナールーム
- 7PDU、ITC実践力ポイント7時間分

● デザイン思考基礎

～ 優れた顧客経験 (CX) を提供する ～

- 日時：2月15日(木) 9:30～18:00
- 場所：PMI日本支部セミナールーム
- 7PDU、ITC実践力ポイント7時間分

● デザイン思考基礎

～ 優れた顧客経験 (CX) を提供する ～

- 日時：3月20日(火) 9:30～18:00
- 場所：PMI日本支部セミナールーム
- 7PDU、ITC実践力ポイント7時間分

● 英語によるコミュニケーション・スキルアップ・ワークショップ Persuasive Business Presentations 編

- 日時：2月6日(火) 9:30～17:30
- 場所：PMI日本支部セミナールーム
- 6.5PDU、ITC実践力ポイント6.5時間分

【月例セミナー開催場所の変更について】

2018年度の月例セミナーは、開催場所を渋谷に移して下記の日程で行います。

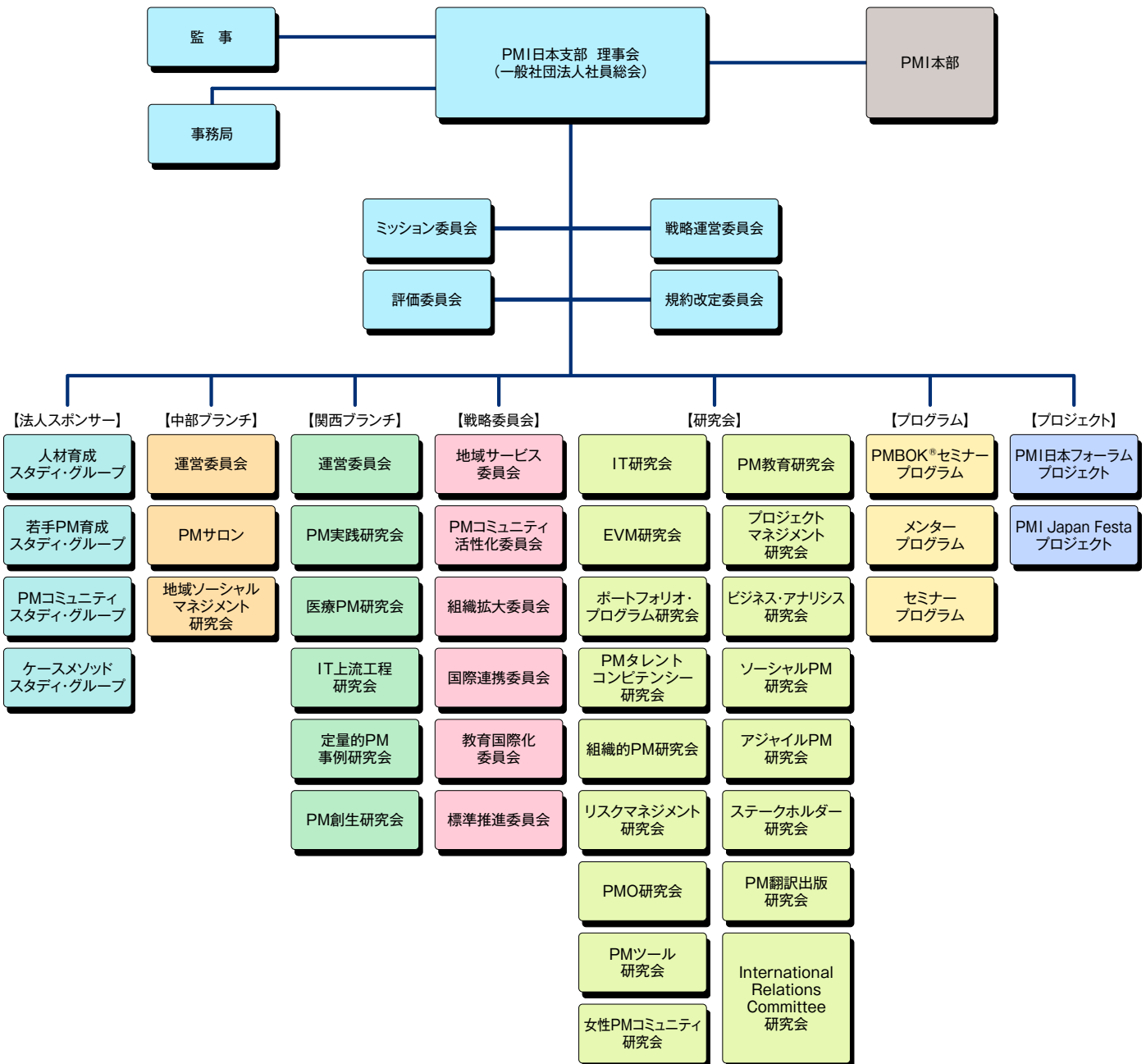
| | | | |
|----------|---|-----------------|------------------|
| 【日程(予定)】 | ① 2018年1月19日(金) | ④ 2017年4月13日(金) | ⑦ 2017年 9月14日(金) |
| | ② 2017年2月16日(金) | ⑤ 2017年5月11日(金) | ⑧ 2017年12月13日(木) |
| | ③ 2017年3月14日(水) | ⑥ 2017年6月 6日(水) | |
| 【場 所】 | アクセス渋谷フォーラム 東京都渋谷区渋谷2-15-1 渋谷クロスタワー24階 東京メトロ銀座線、半蔵門線、副都心線 「渋谷」 駅15番出口から徒歩3分 | | |

*なお、イベント、セミナー、コースなどは、諸般の事情により変更または中止される場合があります。
PMI日本支部ホームページで確認をお願いいたします。(https://www.pmi-japan.org/event/)

Fact Database / データベース

PMI日本支部やPMP®資格取得者に関する最新情報をお届けします。

■ 支部活動 (2017年12月現在)



■理事一覧 (2017年9月現在)

| | |
|-----|-------------------------|
| 会 長 | ：奥 澤 薫 (KOLABO) |
| 副会長 | ：片 江 有 利 (PMアソシエイツ株式会社) |
| 副会長 | ：端 山 毅 (株式会社NTTデータ) |

(以下、五十音順)

| | |
|---------------------|---------------------------------|
| 理 事 (PMコミュニティ活性化担当) | ：麻 生 重 樹 (日本電気株式会社) |
| 理 事 (教育国際化担当) | ：井 上 雅 裕 (芝浦工業大学) |
| 理 事 (戦略運営、地域サービス担当) | ：浦 田 有 佳 里 (株式会社HS情報システムズ) |
| 理 事 (地域サービス担当) | ：木 南 浩 司 (株式会社マネジメントソリューションズ) |
| 理 事 (教育国際化担当) | ：斉 藤 学 (スカイライトコンサルティング株式会社) |
| 理 事 (国際連携担当) | ：杉 村 宗 泰 (日本マイクロソフト株式会社) |
| 理 事 (ミッション、標準推進担当) | ：鈴 木 安 而 (PMアソシエイツ株式会社) |
| 理 事 (ミッション、組織拡大担当) | ：武 上 弥 尋 (日本アイ・ビー・エム株式会社) |
| 理 事 (PMコミュニティ活性化担当) | ：高 橋 正 憲 (PMプロ有限会社) |
| 理 事 (PMコミュニティ活性化担当) | ：竹 内 正 興 (一般財団法人国際開発センター) |
| 理 事 (PMコミュニティ活性化担当) | ：当 麻 哲 哉 (慶應義塾大学大学院) |
| 理 事 (組織拡大担当) | ：徳 永 幹 彦 (株式会社日立インフォメーションアカデミー) |
| 理 事 (標準推進担当) | ：中 嶋 秀 隆 (プラネット株式会社) |
| 理 事 (PMコミュニティ活性化担当) | ：福 本 伸 昭 (日本アイ・ビー・エム株式会社) |
| 理 事 (財政担当) | ：三 嶋 良 武 (株式会社三菱総合研究所) |
| 理 事 (戦略運営、組織拡大担当) | ：森 田 公 至 (日本アイ・ビー・エム株式会社) |
| 理 事 (教育国際化、標準推進担当) | ：除 村 健 俊 (株式会社リコー) |
| 監 事 | ：神 庭 弘 年 (神庭PM研究所) |
| 監 事 | ：平 石 謙 治 (ビー・ティー・ジー・インタナショナル) |
| 監 事 | ：渡 辺 善 子 (株式会社日本政策金融公庫) |

■最新の会員・資格者情報 (2017年10月31日現在)

| 会員数 | | 資格保有者数 | | | | | | | | |
|----------|--------|----------|---------|---------|----------|-------|----------|-------|----------|-------|
| | | PMP® | | PMI-SP® | PMI-RMP® | PgMP® | PMI-ACP® | PfMP® | PMI-PBA® | CAPM® |
| PMI 本部 | 日本支部 | 世界全体 | 日本在住 | 日本在住 | 日本在住 | 日本在住 | 日本在住 | 日本在住 | 日本在住 | 日本在住 |
| 495,676人 | 3,819人 | 805,800人 | 35,905人 | 4人 | 6人 | 5人 | 32人 | 3人 | 3人 | 118人 |

■行政スポンサー (2017年12月現在)

- ・三重県 桑名市
- ・滋賀県 大津市

■法人スポンサー 一覧 (109社、順不同、2017年12月現在)

- TIS株式会社
- 日本アイ・ビー・エム株式会社
- 株式会社NSD
- 株式会社インテック
- キヤノンITソリューションズ株式会社
- 日本電気株式会社
- 株式会社ジェーエムエーシステムズ
- アイアンドエルソフトウェア株式会社
- 株式会社NTTデータ
- 日本マイクロソフト株式会社
- プラネット株式会社
- 株式会社建設技術研究所
- 日本ユニカシステムズ株式会社
- 株式会社クレスコ
- ラーニング・ツリー・インターナショナル株式会社
- 日本ヒューレット・パッカード株式会社
- 株式会社アイ・ティ・ワン
- コンピューターサイエンス株式会社
- 株式会社タリアセンコンサルティング
- TDCソフトエンジニアリング株式会社
- 株式会社大塚商会
- 日本プロセス株式会社
- 株式会社NTTデータ関西
- 日本ユニシス株式会社
- Kepner-Tregoe Japan, LLC.
- JBCC株式会社
- 株式会社富士ゼロックス総合教育研究所
- 日本アイ・ビー・エム・ビズインテック株式会社
- 株式会社アイテック
- 株式会社エヌ・ティ・ティ・データ・フロンティア
- 株式会社日立インフォメーションアカデミー
- 情報技術開発株式会社
- 富士ゼロックス株式会社
- アイシンク株式会社
- 千代田システムテクノロジー株式会社
- 三菱総研DCS株式会社
- ソニーセミコンダクタソリューションズ株式会社
- 東芝テック株式会社
- 三菱スペース・ソフトウェア株式会社
- 株式会社三菱総合研究所
- NTTデータアイ株式会社
- 新日鉄住金ソリューションズ株式会社
- 株式会社日立ソリューションズ
- 日本自動化開発株式会社
- 日揮株式会社
- 株式会社野村総合研究所
- 株式会社アイ・ティ・イノベーション
- NECネクサソリューションズ株式会社
- 株式会社JSOL
- ニッセイ情報テクノロジー株式会社
- 株式会社リコー
- 株式会社システム情報
- 住友電気情報システム株式会社
- 株式会社エヌ・ティ・ティ・データ・ユニバーシティ
- 株式会社マネジメントソリューションズ
- NDIソリューションズ株式会社
- 株式会社日立製作所
- 株式会社システムインテグレータ
- 日本ビジネスシステムズ株式会社
- コベルコシステム株式会社
- 日本電子計算株式会社
- 富士電機株式会社
- 株式会社日立システムズ
- 株式会社神戸製鋼所
- 日本証券テクノロジー株式会社
- クオリカ株式会社
- 株式会社エクサ
- International Institute for learning - Japan 株式会社
- 株式会社ラック
- ニューソン株式会社
- 三菱電機株式会社
- TAC株式会社
- 日本情報通信株式会社
- 日立INSソフトウェア株式会社
- 株式会社シグマクシス
- 株式会社TRADECREATE
- 株式会社日本ウィルテックソリューション
- システムスクエア株式会社

- 株式会社アイ・ラーニング
- 株式会社トヨタコミュニケーションシステム
- 東芝インフォメーションシステムズ株式会社
- Innova Solutions, Inc.
- 株式会社ワコム
- 株式会社HGST ジャパン
- NCS & A 株式会社
- 日本システムウェア株式会社
- 日立物流システム株式会社
- SCSK 株式会社
- 株式会社東レシステムセンター
- ビジネステクノクラフツ株式会社
- 株式会社シティアスコム
- SOMPOシステムズ株式会社
- 株式会社エル・ティー・エス
- 株式会社日立産業制御ソリューションズ

- MS & ADシステムズ株式会社
- 日本クイント株式会社
- 第一生命保険株式会社
- リコージャパン株式会社
- 株式会社HS情報システムズ
- 株式会社アジャイルウェア
- 株式会社ビジネス・ブレイクスルー
- ソフトバンク・テクノロジー株式会社
- 株式会社インテージテクノスフィア
- 株式会社ネクストスケープ
- セブンスカイズ株式会社
- 関電システムソリューションズ株式会社
- 伊藤忠テクノソリューションズ株式会社
- 株式会社オーシャン・コンサルティング
- パナソニック ソリューションテクノロジー株式会社

■アカデミック・スポンサー 一覧 (40教育機関、登録順、2017年12月現在)

- 産業技術大学院大学
- 慶應義塾大学 大学院システムデザイン・マネジメント研究科
- サイバー大学
- 芝浦工業大学
- 金沢工業大学
- 九州大学大学院芸術工学府デザインストラテジー専攻
- 広島修道大学経済科学部
- 北海道大学 大学院情報科学研究科
- 山口大学大学院技術経営研究科
- 筑波大学大学院システム情報工学研究科 コンピュータサイエンス専攻
- 早稲田大学 ビジネススクール
- 早稲田大学 理工学術院 基幹理工学部 情報理工学科
- 公立大学法人 広島市立大学 情報科学部
- 国立高等専門学校機構 仙台高等専門学校
- 北海道大学 サステイナビリティ学教育研究センター
- 大阪大学 大学院工学研究科 ビジネスエンジニアリング専攻
- 愛媛大学工学部および大学院理工学研究科工学系
- 国立高等専門学校機構 八戸工業高等専門学校
- 学校法人中部大学 経営情報学部
- 京都光華女子大学
- 鹿児島大学産学連携推進センター
- 中央大学 文学部社会情報学専攻
- 千葉工業大学 社会システム科学部 プロジェクトマネジメント学科
- 京都工芸繊維大学 ものづくり教育研究支援センター
- 東京工科大学大学院 コンピュータサイエンス専攻
- 北海道情報大学
- 山口大学工学部知能情報工学科
- 川崎医療福祉大学医療福祉マネジメント学部 医療秘書学科および大学院医療秘書学専攻
- 青山学院大学 国際マネジメント研究科
- 公立大学法人 公立はこだて未来大学
- 大阪府立大学 21世紀科学研究機構 産学協同高度人材育成センター
- 慶應義塾大学・理工学部・管理工学科・飯島研究室
- 就実大学 経営学部
- 神戸女子大学 家政学部 家政学科
- 明石工業高等専門学校 建築学科 大塚研究室
- サレジオ工業高等専門学校 一般教育科 物理教育学研究室
- 北陸先端科学技術大学院大学 知識マネジメント領域
- 中京大学 情報センター
- 法政大学専門職大学院イノベーション・マネジメント研究科
- 札幌学院大学

Editor's Note / 編集後記

執筆者の皆さまへ。お忙しいところ、ご協力いただきありがとうございました。

- 去る11月11日・12日に延べ840名の方々においでいただき、盛況裡に終了した「PMI Japan Festa 2017」。今年は全国向け同時中継システムを導入し会場にお越しになれない方も満足いただけたのではないのでしょうか。今号で8つの講演の概要をご報告しました。
- 日本支部の部会活動紹介シリーズ。今号は、『ステークホルダー研究会』、『組織的プロジェクトマネジメント研究会』の2部会と、法人スポンサー企業さま社員による『人材育成スタディ・グループ』の3つです。
- 2017年9月から12月にかけて実施した主な支部活動から、①2017年度地域セミナー（全国10カ所）、②PMI日本支部リーダーシップミーティングLM2017、③中部ランチ設立2周年記念特別セミナーの3つのイベントの概要を報告しました。

ニューズレター編集担当から読者の皆様へお願い

ニューズレターは、皆さまからの書評、論評、トピックス、セミナー受講レポート、プロジェクト体験記、PMP認定試験受験体験記などを募集しています。お気軽にPMI日本支部事務局宛てにお送りください。

2017年の世相を表す師走恒例の「今年の漢字」が発表され『北』に決まりました。北朝鮮の動向、北海道産のじゃがいも供給不足、7月の九州北部豪雨、清宮幸太郎選手の北海道日本ハムファイターズ入り、競馬界を賑わせたキタサンブラックの活躍、盛況だった葛飾北斎展覧会など、『北』にまつわる出来事が多かったからとか。漢字一文字にまつわる出来事を振り返ってみるのも一興ですね。

年末になって、PMBOK®第六版 日本語版の発刊の遅れが生じ、予約いただいた方々には大変なご迷惑をおかけし申し訳ありませんでした。2018年1月のうちには発送出来る見通しです。

今年も一年、お世話になりました。来年は新しい理事体制の下で支部設立20周年事業を展開しますので、よろしくお願い致します。

PMI日本支部ニューズレター Vol.73 2017年12月発行

編集・発行：PMI日本支部 事務局
 〒103-0008 東京都中央区日本橋中洲3-15 センタービル3階
 TEL：03-5847-7301 FAX：03-3664-9833
 E-mail：info@pmi-japan.org
 ホームページ：https://www.pmi-japan.org/

(非売品)